
どうやら、いじめられっ子の魔王が俺と世界征服したいそうです。

水面

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

どうやら、いじめられっ子の魔王が俺と世界征服したいそうです。

【Nコード】

N1697Y

【作者名】

水面

【あらすじ】

ただいま試験中につき検索より除外中

縦読み推奨

プロローグ（前書き）

前書きは物語の一部となっております。

プロローグ

学校の怪談。

誰が考えたのか、どこも同じようなしっぱい話がいくつかある不思議なアレだ。

もちろんこの俺——東條信弥が通っている学園にもある。

トイレにいらっしやるあの方。自走する模型。目を光らせたり、勝手にピアノを弾く音楽室の偉人。

トイレは洋式で、模型も肖像画もないこの学園には、とある変わった話がある。

学園の裏手に生えてる大桜。

四〇五人の手を繋いでようやく囲める樹幹。遙かに見上げる、その高さ。春には花びらを涼風に乗せて、空と地上を桃色に彩る。休み時間には、生徒がベンチや草地に陣取り、お弁当などを広げて憩いの場になる。

その中心に悠然とそびえたつあの大桜には……、どういう訳だか魔王が封印されていたらしい。

何かが憑いてもおかしくないほどの立派な大木だと思うが、学校の怪談くらいで魔王様がしゃしゃりでて——もとい、いらっしやるなんて安売りはやめたほうがいいと思う。

この大桜の満開を見上げるのは、今年で三度目になる。

「のお信弥、わらわはお腹が減ったぞ。いつまで桜を見上げておるのだ」

その封印されていたらしい？　魔王様が制服の袖を引っ張りながら訴えてきた。

「そうだな、帰って美弥みやが作ってくれる晩飯を食べようか。今日は咲耶が好きな、鳥のから揚げらしいぞ？」

「本当か！　もう〰美弥めえ〰、わらわのご機嫌取りとは、愛うい奴

めっ
」

すこぶる嬉しそうだ。

俺と咲耶はしっかりと手を繋いで、歩き出した……。

うつしよ
現世は変わらない。

出会い（前書き）

美弥が垣間見たものとはなんだったのだろう

出会い

午前中のイベントである春の式典が終わった。

昼過ぎに俺はあの桜の元へと来ていた。

今日は午前授業だけなので、人が見当たらない。

手近なベンチへと腰掛ける。

見上げると、目の前に桜の花びらが舞い散る。大きく広がった見事な枝が桜の花をいくらでも咲かせていた。

咲き乱れる桜を見にくるような雅な趣味でも、見ず知らずの女の子からの手紙で呼びだされる程もてる男でもない俺だが。

視界の向こうからこちらに駆けてくる女の子が一人。

本日めでたくこの東武学園に入学した、妹である東條美弥だ。

俺なんかにほもったいたないくらい、よく出来た妹である。

ベンチから立ち上がって美弥を迎えた。

そばまで駆けよってくる。

まるで全力疾走した後のように膝に手をついて、長く艶やかなツインテールを上下に動かしながら息を整える。

肩に舞散る桜と同じぴんく色に頬を上気させながら、申し訳なさそうに言う。

「に、兄さん……、遅れて…、ごめんなさい」

「そんなに急がなくてもよかったのに」

肩についた花びらを指先で払ってやる。

美弥は顔を赤らめて、照れくさそうに答えた。

「だ、だってせっかく兄さんが学校を案内してくれるんです。でも、ここに来るときに少し迷ってしまっ……」

「やっぱり昇降口あたりで待ち合わせたほうが良かったんじゃないかな」

「いいんです。こういうのもデートの待ち合わせみたいで新鮮でしたよ。——それで、これが桜の大樹ですね。すごく素敵です」

美弥につられて視線を移すと、咲き乱れる桜花と青い空のコントラストがまぶしい。

春風に舞い踊る花びらが、ここではない違う世界へと誘っているかのようだった。

「くしゅん」

かわいいくしゃみが聞こえた。

初春の冷たい風が美弥の汗と一緒に体温も風に乗せていったのだろう。

「美弥、大丈夫？」

「大丈夫ですよ兄さん。でも、久しぶりに撫でてほしいです。いい……ですよね？」

よく出来た妹はときどきこうして兄に甘えてくる。

こんな風におねだりされて断ることが出来る兄はいないだろう。

もし居るならば、そいつには兄の兄たる資格などありはしない。

今は誰も見当たらないが、いつもは人で溢れている場所で妹の頭を撫でるといのは少し気恥ずかしい。

だがこれも兄としての勤めである。はにかみながら愛しの妹に手をのばした。

「よしよし、なでなで」

気持ちよさそうに目を細めて、「ふにゃ」と猫みたいな声を出して撫でられるがまだ。

ご満悦の美弥だったが、――薄紅色だった顔が心なしか青く変わっていく。我が妹らしからぬ驚愕きょうがくの表情で怯えているようだった。

「美弥？ どうした、大丈夫か！」

なすかな声を残して卒倒した美弥。その体をあわてて抱きかかえる。

「美弥、美弥！」

「に、兄さん……」

ふらついている腕を桜の方へ向けて、力なくうなだれてしまった。俺はおそろおそろ慎重に、美弥の指が示していた背後を振り向く。

——長い銀髪を風になびかせていた少女がそこには居た。吹き抜ける桜に舞う銀の軌跡。

派手すぎない装飾を施した白衣と、胸元に見える朱い掛襟^{かけえり}。同じ朱色の足元まである緋袴^{ひばかま}。そこからちょこんと飛び出た白い足袋^{たび}。これは巫女服だな。

しかもただの巫女服じゃない。素人目から見てもコスプレや神社で見るバイトの巫女さんの着ている物より、ずいぶんと高級品であろう。

だがせっかくの巫女服もあちこちすすけたたり、ほつれている。なによりこれを着ている銀髪少女は頭を抱えて丸くなりながら、小柄な体をプルプルとさせている。

そんな仕草が、まるで雛鳥のように思えた。
なんかすごく残念な感じだ。

だがそんな姿がだんだんと愛らしく思えてくるから不思議だ。
こうしていても埒が明かないので、思い切って話しかけてみる。

「あの……」

ぴくりと反応する少女。

片方の瞳だけを使い、おっかなびっくり上目遣いに覗きこむ。
かわいい……。すっごく守ってあげたくなる。

「萌えとは、保護欲と支配欲との葛藤からくるものである」と、聞いたことがある。今感じているこの感覚が、その萌えというやつなのだろう。

そんな彼女と目が合ってしまった。

「ヒッ」

短い悲鳴をあげて顔を伏せてしまう。

そして、再びゆっくりと腕の隙間から顔を出す。
かわいい……。

——不意に、彼女がこちらを見つめかえしてきた。
大きくて純真無垢な瞳。

「……………そ、そなたらは、その……、東^{あずま}の者であろう」

搾り出すようにして出された声。風にかき消されそうで、聞きたるのがやつとだ。だが澄すんだ彼女の声は、よく通るような気がする。「俺の名前は東條信弥。こっちは妹の美弥。君は？」

ゆつたりと立ち上がった小さな少女はとてとと近よってくる。腰まわりに抱きついて——もとい、しがみついて顔をぐりぐりと制服にうずめる。

「やっぱり東《の者じゃな。会いたかったぞ。よくぞ我を助けてくれたのじゃ」

震えていた割には、なかなか偉そうな言葉づかいである。両手で制服を掴んでぐいぐいとやってきて離そうとしない。

近くで見ると、やはり小さい子だ。ぼろぼろな簪かんざしもよく見ると精巧な造りで、さらさらな銀髪から薫かおる甘いお香が鼻をくすぐった。

揺さぶられているうちに、美弥が意識を取り戻した。

「……に、兄さん私、宇宙を見たんです……。三次元宇宙を内包する四次元宇宙が干渉して生まれた時空の裏側を。私は確かに——」
「もういいんだ美弥。世の中には忘れても許される事もあるさ。それにこの物語はそういう方向性じゃないんだ」

錯乱気味の妹を優しく諭す。

「よ、よく解らないですけど……。兄さんが言うならそうなのかも……」

よく出来た妹は物分りも大変よろしい。

そんな妹はおぼつかない足取りで立ち上がった。

まだ制服をぐいぐいとやってる少女の目線にあわせて中腰になり、優しく語りかけた。

「こんにちは。私は東條美弥っていいいます。よろしくおねがいします。あなたのお名前を教えてくださいませんか」

「東の妹じゃな、うむ。——わらわは遙か昔この地を統すべた魔王が一人、天白羽神玖珂院咲耶あめのしらほのかみくがいんさくやのひめ之姫じゃ。『咲耶』とよんでよいぞ」

ピンポンパンポーン

（生徒の呼び出しをします。二年四組東條信弥。ならびに、一年三

組東條美弥。至急職員室まで来るように。くり返します。二年――）

魔王（前書き）

真理子先生お手製のパンフですよ

魔王

遙か昔、人間と魔物は世界中で共存していました。

魔物とは、広くは大型の肉食獣から蛇や鳥まで多種多様な種族を含む力を持つ者の象徴。

神、天使、悪魔、幻獣、妖精、ある地方ではドラゴン、ヴァンパイア、妖怪。

その中でも、人には為しえない御業を起こす存在で、特に強い魔物達を人々は――魔王と呼んだ。

彼らは互いの領分を侵すことなく、互いに助け合うよき隣人であった。

しかし、違う種族の共存は簡単ではありませんでした。

人間にも魔物の中にも悪しき者が現れ、小さな争いが絶えなくなっていくます。

時を重ねるにつれ、人間は魔物のもつ絶対的な力を次第に恐れるようになります。

ついに、人間たちは魔物の討伐を決めました。

各地で力ある人間――勇者の指導の下、魔物を常世へと還します。人間に住処を追われた魔物は、自ら常世へ還ることを選びます。

神が統べる島国。

特に力の強い魔王が、東と西と南と北に分かれて暮らしていたといっています。

彼らも常世へと還りました。

その中で、東の魔王は最後まで残り続けました。

この魔王はあまりの強大な力故に、常世へと還ることができなかつたのです。

時の勇者――東比之守は、魔王の力の根源たる精神と肉体ではなく、魔王の心を封じこめ、常世へと還したのでした。

東武学園監修 魔王の歴史その一

受けとったパンフレットを読み終える。

先ほどの放送で俺達をよびだしたのは二学年副主任である——秦^は宮真理子先生だ。
たみやまりこ

どかりと座りこんでいる先生は、すらりと長い足を組みかえて面倒くさそうに言った。

「読み終えたかい。そういうわけでその子は魔王なんだ。よろしくしてやってくれ」

「よろしくと言われても……。魔王が復活って世界規模でやばい感じがしませんか？　なんとなくですけど……」

「そういう魔王も居るかもしれないな。でもその子は大丈夫だろう。それに弱い魔物——君たちが思うところの悪魔だとか妖怪だとかは現世^{げんせ}に結構居るんだよ。世間にはあまり知られてないかもしれないがね」

秦宮先生が天のなんとか——咲耶と名乗った少女に視線を移す。

彼女は俺の後ろに隠れてしまっただけで離れようとしないう。

確かにこんな子が魔王といわれても説得力が無い。

「魔王クラスの魔物だってちよくちよく現世^{げんせ}に来てるよ。今は西の魔王の稲荷神^{いなりのかみ}が遊びに来てるんじゃないかな」

西の魔王の名前を聞いた瞬間、背中に隠れている魔王^{まおう}が震え上がった。

「心配しなくても、昔は共存していたんだ。早々めったなことでは起こらないよ」

とりあえず世界が滅亡するとかはないらしい。たぶん。

「神様でも魔王とよばれる理由は、なんとなくですが理解できました。でも勇者って表現はなにか変な感じがしませんか？」

「魔物や魔王、勇者ってのは世界中にいるんだ。グローバル化の波に乗って国際規格を決めてから日本語訳にすると勇者だったんだ。あきらめろ」

「はあ……………」

「それで、ここからが本題なのだが……」

ダルそうにしていた顔を少しだけ真面目して、話を続ける。

「天白羽神玖珂院咲耶之姫様はそのパンフにも書いてある通りちょっとばかり特殊でね。魔王なのに幼く感じるのは封印のせいだろう。それをあんたが解いちゃったんだろぅね」

「でも俺、封印なんて言われても。何がなんだかさっぱりです」

「それは、その天白羽神様に聞いてみるのがいいんじゃないのかな」

俺のまわりをうろちよろしてる咲耶を捕まえて聞いてみた。

「わらわの封じた呪術を解くには三つの要素が必要じゃった。一つは東の血族であること。一つは慈愛の心。一つは相手を思いやるものと、頭を撫でるときの言霊じゃ。わらわが現世に再び参る時には、『味方になってくれる者が必ず居るように』と、東がはからってくれたのじゃ」

あの時、慈愛の心え「大丈夫？」と声をかけて、美弥の頭を撫でた気がする……。

「——素敵なお話ですね」

いままで話の流れを見守っていた美弥が言った。

「……なるほどね。本来この東武学園は天白羽神様を見守るために出来たんだよ。私はその現管理人みたいなもん。当時としては追いつく形になってしまったが……。現世と常世の交流は続いているの。封印の解き方が判らなかったから、天白羽神様を現世にお呼びすることが出来なかったんだよ」

秦宮先生は複雑そうな顔をして、咲耶をじっと見つめていた。

「それにしても、天白羽神様はけっこう上位で取り扱い注意な魔王様なんだけど、どうしてこんなに内気な魔王様なのかしら？」

秦宮先生が咲耶を見やる。同じ疑問を持った俺は、彼女に聞いてみた。

「常世でみんなわらわに意地悪するのじゃ。いやだって言ってるのに離してくれないし。おまけにあちこちさわってくるし。むりや

りご飯たべさせられたり。なにかにつけてわらわをいじくりたおすのじゃ。もういやなのじゃ……。わ、わらわにも人権というものがあるのだ。それに——」

言っているうちに、だんだん目に涙を浮かべていく。

これだけ聞くと。なんとなく卑猥に聞こえてしまうな。

魔王は腕をぶんぶん振りまわして必死に訴えている。

かわいがる気持ちも判らなくもないが……。

思いのたけをぶつけ終えた咲耶。またすぐすごと背中に隠れてしまう。

そして秦宮先生は彼女の話をもとめた。

「どうやらこの魔王様は、いじめられてこんな性格になってしまったらしい」

「……………」 「……………」 「……………」 「……………」

場の空気が凍りつていた。

あゝ、言ってしまった……。俺と美弥が気づいても言わなかった一言を、本人に向かってド直球で言ってしまった。

しれっとした顔でいる秦宮先生。咲耶も俺の制服の袖をつかんで動かない。

——この沈黙を破ったのは、意外にも咲耶だった。

「……せいふく。せ、世界征服じゃ。あやつらを見返すには……、この地をわらわのものにするしかないのだ！ 信弥もわらわの右腕となり、存分にその腕振るうとよかろう。期待しておるぞ。な？ よいじゃろ？」

取り扱い注意の魔王に世界征服を宣言させてしまった。さらに、それを俺に手伝えと言っている。——というか、お願いされている。でもこの子が俺の背中に隠れているうちは、世界は平和なままだろう。

魔王の宣言を完全にスルーの秦宮先生は、ハッと思いだしたよう

に言った。

「東條、一番大事なことを言い忘れてたよ。咲耶様は今日からあなた達の家で暮らすことになるから。ついでに明日から信弥君と同じクラスで授業を受けてもらうことになると思う。」

「え？」

「さっきも言ったように、東武学園は天白羽神様をお世話するためにあるんだよ。天白羽神様も信弥君に懐いているみたいだし、現世げんせに慣れてもらうには丁度いいじゃないか。……なんだい。親御さんから魔王について、本当になにも聞かされていないみたいだね」

新たなる旅立ち（前書き）

「いいですか咲耶さん。もう桜の木の前でやったように、宇宙げんせの法則を捻じ曲げてはいけませんよ」「ええ〜〜〜」「ええ〜〜〜じゃない。それに咲耶さんは女の子なんですから、はしたないことをしていると、兄さんに嫌われてしまいますよ」「う〜ん、……わかった」「はい。咲耶さんはいい子です」

新たな旅立ち

俺と美弥は魔王を家に連れて帰った。

帰る道、二人は女同士の秘密の話をしていたらしい。

話の内容を美弥に聞くと、顔を赤らめて「兄さんは不潔です」なんて言われた。

咲耶に聞いても口止めされていたらしく、話してくれない。

なんだか仲間はずれな気分だ。

帰ると、親父がすでに家にいた。

話があると言われて、リビングの四人がけテーブルに並んで座る。美弥が麦茶をだしてくれた。咲耶は冷たい飲み物に目を輝かせていた。

あめのしらはのかみくがいんさくやのひめ

「天白羽神玖珂院咲耶之姫様ですね。お初にお目にかかります」

「うむ、くるしゅうない。信弥のお父君であるな。我のことは、『咲耶』と呼ぶがよいぞ」

仰々しく挨拶をすませる二人。

「おい親父、こんな時間に家にいて仕事はいいのかよ」

「うん、仕事は辞めてきた」

「はあ？」

親父もついに不況の波に吞まれたか。

「まあ聞きなさい。私もお前のお爺さんから、勇者だの魔物だのとはきいていた。だが私はそんなものとは縁もゆかりもない世界で、世間の荒波にもまれながら社畜として一生懸命に働いてきたわけだし、しみじみと語られてしまった。

「だが今日、魔物を管理する団体から『咲耶様のお世話をする代わりに』と、多額のお金を貰ってな」

「いくらもらったんだよ」

ニヤニヤと汚い笑みを浮かべた親父は、もったいぶって言った。

「ん〜、信弥にはお金の話はまだ早いかな〜？ あえて言うなら、贅沢しても遊んで暮らせるくらいだ。そういうわけで、私と母さんは世界一周の旅に出かけてくる。いつ戻るかは判らん」

「はあ？」

「ほら、母さんには今まで苦勞をかけたし。咲耶様もここに住むことになるんだ。五人だとこの家も手狭に感じてしまうだろ？ それならいっそのこと、母さんの夢だった世界一周旅行にでも行こうかなって。ほら、今って円高だし」

「なんということだ……。俺が咲耶と出合って半日も経ってないのに。その行動力を他の所で生かせれば、もっと出世できたらうに。」
「生活費なんかは毎月ちゃんと振り込んで、ポストカードも送るから、そんなに寂しがらなよ」

「いや、そういう事じゃなくて……」

「飛行機の時間が近づいているし、あんまり母さんを待たせると悪いから。戸締りと火の元の確認だけはしっかりするように。美弥、信弥と咲耶様のこと……。よろしく頼んだよ」

「さすがのような目で親父は言った。」

「はい、お父さん。氣をつけて行ってきたください」

「じゃ！」と、一言残して親父は旅立ってしまった。

よく出来た妹は何事にも動じない。

俺は呆然とその背中を見送るしかなかった。

状況を飲み込めていない咲耶。麦茶の氷を口に入れて目をギュッと閉じ、身を縮こまらせながら冷たさに耐えていた。

新たな旅立ち（後書き）

旅立つのは主要キャラクターではなく、親だったという解り難いギヤグです。

どうせ常世にでも旅立つんだろ？ って毛ほども思った方は罰として最後まで読んでください。

常世《とこよ》（前書き）

現世うつしよにオチル。現世げんせに生きる。

常世《とこよ》

「兄さん。まずは咲耶さんの部屋を決めなくてははいけません。隣の和室を使いたいと思うのですが」

「わらわは信弥と一緒にならどこでもよいぞ」

「そういうわけにはいきません。兄さんは和室の方付けをお願いします。私は夕食の用意がありますので」

流行っているらしい、『ゆるキャラ』の大きなワッペンを付けたエプロンを装着して、いそいそと台所へと向かう。

炊事・洗濯・掃除と、家事も万能の妹の意見は、この家では絶対なのである。

「よし咲耶、美弥様からの勅命だ。和室を平定しにいくぞ！」

「おー！」

左足にへばりついてる魔王まへを引きずって、普段使われていない和室にやってきた。

扉を開けると、い草の落ち着いた青い匂いが広がる。

すりガラスを障子に似せた窓が一つ。畳ばりの部屋で、日当たりは悪くない。床の間にはなんだかよくわからない水墨画らしき掛け軸が飾ってある。

特に汚れているわけではないし、部屋として使う分には十分だろう。

だがダンボールに詰められた荷物が、五重・六重の塔を建立こんりゅうしていた。

「じゃーまずは、この塔の解体作業からだな」

ガムテープで封がされてない物だけ中身を確認して、目録を箱に書いていく。

昔懐かしいアルバムなんかもでてきた。これを開いてしまうと、晩飯が遅くなってしまう気がする。俺はそっと箱の奥へと戻した。昔の教科書や、小さくなった古着はこの際に捨ててしまおう。美弥

の服は咲耶が着られるかもしれないので除外する。

そんな感じで、黙々と楼閣を崩していく。

不思議な物がたくさん出てくる箱に、咲耶は興味深々だった。

最初こそあれやこれやと騒いでいた咲耶だったが、単純作業に飽きて来たらしい。手を動かす俺のまわわりでバタバタやりはじめた。拳句の果てに、背中に飛び乗って来たりとやりたい放題だ。

だが肩口から顔をだす彼女の長い銀色の髪が、頬や首筋を撫でていく感触はちよつと気持ちよかったりする。

「しゅんやあーうー」

だらしない語尾をかわいくのぼして、畳の上をごろごろと転がっている。

ズゴッ！

痛そうな音が響く。

「ーッ！」

「く」の字になって後頭部を押さえながら、バネみたいに伸び縮みしていた。

「咲耶、大丈夫かい？」

しばらくもんどりうっていた彼女は、目に涙を溜めて擦り寄ってきた。

「しんやあー痛かったのだあー。撫でてほしいぞおー」

言い終わるのが先か、勢いよく飛びついてきた。

受け止めると予想外の衝撃に一緒に倒れこんでしまう。

放り出されないようにしっかりと抱きとめて、空いている手で頭をさする。

体を預けてきた咲耶は、過去を懐かしむように語った。

「……暖かい。東にはよくこうして頭を撫でられたものじゃ。あやつはすぐわらわを子供のように扱いたがる。わらわはそんなことで喜ぶような童わらわでは無いと言うとるに。じゃが常世よしよへと還れたのは、あやつのおかげじゃ。感謝してもし足りぬ。あのあと、東はどのような生涯を送ったのじやろうか。それだけが、唯一の心残りじゃっ

た。じゃが、もはや過ぎ去りし事。信弥とこうして逢えた事が、あやつが生きた証であろう」

咲耶の過去を、少しだけ垣間見た気がした。

少し悲しそうにしている姿は儂^{はかな}げで、物思いに耽^{ふけ}るようにして彼女は胸の中で動かなくなってしまう。

朱と白の巫女装束に彩られた輝く銀の髪と整った顔立は、どこか神秘的な感じさえする。

そんな咲耶の頭を撫でてあやしながら、しばらく抱いていた……。

——それにしても、咲耶はずいぶんと東さんがお気に入りのようにだ。目の前にいる俺のことも見てほしい……。

そこで気づいてしまった。俺は自分のご先祖様にちよつとばかり嫉妬しているのかも、と。

たつぷりと撫でてもらえた咲耶は満足したのか、よじよじと立ちあがる。そして、そもその頭をぶつける原因となった退屈について不満を洩らす。

「信弥、いつまで箱を開けて閉めてをくり返せばよいのじゃ。わらはもううんざりなのじゃ。もつとほかにやることはないのか？」

「ダンボールは仕分け終わったから、必要の無いやつは物置へ運ぼう。咲耶も手伝ってくれるかな？」

「うむ。大船に乗ったつもりで我にまかせるがよいぞ」

「こっち側にあるやつを二階の奥の部屋に持っていくから、この小さい方を持ってもらえるかな」

衣類が入った軽いダンボールを選んだつもりだったが、彼女はぷりぷりと怒っているようだ。

「わらわ自らが肉体労働に精を出そうというからに、こーんなちゃんまりとした物など運べるか。そちらの、どっしりとして重そうなのをわらわが引き受けようでわないか」

張り切る気持ちも判らなくもないが、その中には親父が使っていたであろう分厚い本が隙間なく詰められている。小柄な彼女では持

ち上げることすらできないだろう。

「ふんっ、んぬ〜。——っはあ！ はあはあ……」

「それは咲耶には難しいよ。ほら、びくともしてないじゃないか」
案の定ピクリとも動かない。

だが彼女は上下に動かせないとみるや、あろうことか今度は横からダンボールを押しはじめた。

「——っぬう〜〜〜」

それでも頑かたくなに動こうとしないダンボール。履はいている足袋が畳の目に沿ってつるつると滑っているのだ。

我が家の魔王はずいぶんと華奢きゃしゃな足腰であった。

どうやっても文字通り動かせないと悟った咲耶。

その様子をニヤニヤ見ていた俺に対して視線を合わせようとはせず、ばつの悪そうに言った。

「久方ぶりの現世うつしよゆえに、このようなことも稀に起こりえるやもしれんな……。だ、だが！ わらわも一度言うたからにはこの務め、見事果たしてみせようぞ」

言い訳がましくの給たまう。

今度はその場に仁王立ちになる。

——純粹な瞳が、目の前の虚空を映す。——りょうてをゆっくりと、むねのまえで、ひろげて。——いきおいを、ツケテ。——テヲ、ウチナラス。

パンッ！

——その刹那、咲耶とそのまわりの空気が冷たく停まったよ
うな気がした。

その気配は存在を濃くして俺に迫る。

残酷な世界が俺に纏まとわり憑いて離れない。

天地の感覚が無くなる。

落ちていく。墜ちていく。

だが上も下もない所に堕ちることはできない。

ここに居る自分の存在がどこか別の場所にオチテいくのがわかる。
オレではない、ココではない、常世はしよに。

——咲耶の柏手かしわでが終わった。

俺はおちていた。いや、もしかしたら昇っていたのかもしれない。
咲耶の拍手が響いている間。その数瞬。咲耶の音に連れ去られて
しまった。

急にあたりが明るくなった気がした。帰ってきたのだ。現世うつしよに。
だが、俺は気づいてしまう……。

——魔王がこちらを觐覧えいらんしていた。

微かに歪められた口もとが艶然えんぜんとした笑みを浮かべ、妖艶で魅惑
的なその顔はなによりも美しい。

吸い込まれそうになる。

その顔に。

なにもかもを認め、——許し、——従い、——受け入れ、——差
し出し、——。

「——東の者よ、この程度で侵食ひそくまれるでわないぞ」

魔王から聞こえたような気がしたその声は、俺の頭の中を廻り廻
って、やっぱり咲耶から聞こえた気がした。

いつの間にか、彼女の顔からは挑発的な微笑は跡形も無くなって
いた。そのかわりに向日葵ひまわりのような満点の笑顔を咲かせていた。

今のは何だったんだろう……。

そんな疑問をよそに、咲耶は得意げにダンボールを掴つかんだ。

「よいか、よくよく、見ておるのじゃぞ」

そう言う、さっきまで1ミリも動かせなかったダンボールを片
手で摘つまむように持ち上げたのである！

「ほれ、どうじゃ。そくく、それ！」

まるで綿でできたクッションを弄もてあそんでいるかのように投げたり、
突いたり、回したり。

先ほどの臨死体験など頭の隅に吹き飛んでしまうほどに驚愕した。
この時の俺は口をあぐりと開けて、さぞ滑稽こっけいに見えていただろう。

してやったり顔の彼女。にんまりとした顔でこちらを見ると、あ
ろうことかそのダンボールを投げてきた！

「わああああ！」

慌てて飛びのく。

重いはずのダンボールはふわりと木の葉のように舞い、壁にちょ
こんとぶつかるとそのままずると下に落ちていった。

「きやはははははははっ」

腹を抱えて笑っている咲耶を無視して、そのダンボールにふれて
みた。

——めっちゃめっちゃ軽かった。

たしかに分厚い本が何冊も入ったままの、先ほど彼女がまったく
動かせなかったダンボールである。

どういう事かと思案していると、ひとしきり笑った咲耶が種明か
しをしてくれた。

「わらわのような者にとって物の重さなど些細ちさいなこと。わらわの意
志ひとつで、羽のようにも岩のようにもなるのじゃ。この部屋にあ
る箱はすべて軽くしておいたぞ。さあこれをどこへ持っていくのじ
ゃ」

俺と咲耶は中身のつまったダンボールを高く積み重ねる。そのま
ま無造作に持ちあげ悠々と運んでいった。

その様子を目撃した美弥は、最初こそ驚いた表情でこちらを見て
いたが、二往復目には「咲耶さんはお手伝いして偉いです」などと
褒める始末。

その言葉に咲耶は、てれ笑いで答えていた。

戦慄の、あゝん(前書き)

もぐもぐ……、もぐもぐ……。

戦慄の、あゝん

テーブルに座った咲耶は、今か今かとそわそわしていた。

台所から次から次へと運ばれてくる我が妹お手製の色鮮やかな料理たち。

ご飯にお味噌汁から始まり、おひたし、厚焼き玉子、お刺身、天ぷら、鳥のから揚げ、ハンバーグにポテトサラダ。

香ばしくも甘い匂いが食欲をかきたてる。

美弥が配膳している間は手持ち無沙汰だったので、三人分の飲み物をついでまわる。

「ずいぶんと豪華な夕食だな」

「今日は家族が増えた記念すべき日ですから、奮発してしまいました。咲耶さんのお口にあらうと嬉しいのですけど」

当の本人は、眼前の料理をガラガラとした目つきで食い入るように見ている。

何事かを尋ねられたことに気付いた咲耶は、白く長い袖で口元を「ごしごしと拭^{ぬぐ}って答えた。

「うむ、くるしゅうない。して美弥よ、これは全部食べてもよいのか……？」

「もちろんですよ。待ちきれないみたいでするので、いただきますしうか。咲耶さん、お腹いっぱい食べてくださいね」

「いただきます」と皆で手を合わせた。

いつも通り妹の手料理ほど旨いものはない。

甘くて絶妙な塩加減のふわふわな玉子に、甘辛く揚がったジュシーなから揚げ。やわらかくて中までしっかりと火の通ったハンバーグは箸を入れると肉汁があふれ出てきた。

カチャカチャと食器がぶつかる音がするので何事かと見やると、咲耶が小さな手で箸を使って食べ物をかきこんでいる。

こぼれて散らかり、世辞にもお上品とはいえない。

その様子を見かねた美弥は食器棚からあるものを持ってきた。

「咲耶さん、これを使って食べてみてはどうでしょうか」

いわゆる先割れスプーンというやつを勧める。取っ手がプラスチック製で扱いやすそうだ。

「それはなんじゃ、旨いのか？」

「これはお箸の代わりに使います。食べやすいと思いますから使ってみてください」

素直に受けとる咲耶。

訝しげにスプーンを見たあと、おもむろにその鉄の塊にかぶりついた。
いぶか

——ガリッ。

かぶりついたままの格好で動かなくなってしまった。

その一部始終を目撃してしまい、思わず口の中のものを嘔き出しそうになる。

「ゴハッ、ゴハッ。——な、なにやってるんだよ咲耶。……くつくつ、ははははははっ」

耳まで真っ赤にしながら下を向いて必死に何かを耐えている。

さすがの美弥もこれには口元を隠してくすくすと笑っている。

遠慮なく笑っていたら咲耶は睨みつけられた。その後、何事もなかったかのようにスプーンを驚づかみハンバーグを乱暴にぶつ切りにして、ご飯といっしょに口に運んだ。

「咲耶さん私が食べさせてあげましょうか。はい、あーんしてください」

「よい、食事くらい一人でできるのだ。おい。こら、よさぬか」

「私のお料理は、お口には合わなかったでしょうか……」

箸に玉子を摘みながら、ずいぶんとわざとらしく残念そうに振舞う。

「べ、別に不味いなどとは言っておらぬではないか。むむう、しょうがないの。い、一回だけじゃからな」

咲耶はまるで親鳥に餌をねだる雛鳥のように首をのぼして玉子を

つ
い
ば
む。

——「あゝむう」

もぐもぐ……、もぐもぐ……。

「——ッ！」

玉子を与えた美弥に衝撃が走った！

「あゝゝん」する咲耶が狂おしい程にめんこいのだ。かくいう俺もその庇護欲あふれる光景にただ心を奪われていた……。

あまりのかわいさに安心してた美弥は意識を取り戻すと、今度は贅沢にもエビフライを雛鳥に向かって差し出した。

「はい咲耶さん。今度はエビフライです。あゝゝん、してください。あゝゝん」

「い、一回だけと、言うたではないか……。これで最後じゃからな」

——「あゝゝんう。あむう、あむう」

もぐもぐ……、もぐもぐ……、もぐもぐ……。

まんざらでもない様子の咲耶は差し出されたエビフライを小さなお口でぱくつく。長細いエビフライは彼女がついばむ姿を長く見せてくれた。

美弥は頬に手を当ててうつとりその様子を見蕩れている。すでに彼女の箸には次の料理がスタンバイしていた。

——「あゝゝむん」

もぐもぐ……、もぐもぐ……、——ゴックン。

「も、もうこれで、もぐもぐ……さ、さいごじゃから——」

——「あゝゝむ」

もぐもぐ……。

なんだかんだ言いつつも律儀に美弥の「あゝゝん」に答える。

もぐもぐ……、もぐもぐ……。

——「あゝゝん」

「も……、もう。もぐもぐ……。ちょ、ちよと、もぐもぐ……。ま、

待つ……」

「はいどうぞ。あゝん、してください」

差し出されたから揚げを頬張ってから、たまらず席を立つ。こちらに走り寄ってきて美弥から隠れるようにしてすがってきた。

「もぐもぐ……、もう、もぐもぐ……、ゴックン。よ、よさぬか。

もぐもぐ……。なあ信弥、そなたからも、もぐもぐ……なにか、言うてやるのじゃ。もぐもぐ……」

もぐもぐと雛鳥が親鳥に向かって威嚇する。

助けを求められたが、俺はこの誘惑には勝てなかった。

「咲耶……。はい、あゝん」

「…………ッ！」

呆然と立ち尽くしている咲耶……。

信じていた信弥に裏切られて絶望のどん底に落ちている。

この場に彼女の味方はいなかったのだ。

しばらく動けなかった彼女。我に返ると、再度お口をもぐもぐしだす。

——ゴックン。

そして、観念したかのように差し出されたハンバーグにかぶりついた。

「もぐもぐ……、もぐもぐ……。——ゴックン。こ、これでよいのじゃろ……」

涙目になりながらもぐもぐする咲耶は、とても可愛かった。

征服のススメ（前書き）

魔王より美弥さんの方が怖いです

征服のススメ

思う存分「あ〜〜ん」させてもらった。

あれだけあった料理も三人のお腹の中に消えてしまい、わずかに残った分をちびちびとやっていた。

お腹をぱんぱんに膨らませた我が家の魔王は椅子にだらしく座って、満足げな表情を浮かべながらぐったりとしていた。

あの後さすがにやりすぎたと反省した。平謝りしていると根負けした咲耶が『無理に食べさせない』という条件つきで、また「あ〜〜ん」をしてもよいと言ってくれた。

なんだかんだで彼女も「あ〜〜ん」が好きなのではないだろうか。その証拠に残ったから揚げを目の前にもっていくと、咲耶は嬉々とした表情で飛びついてきた。

にこにことした顔をしながらもぐもぐしてからゴックンと飲みこむ。

その後彼女は「うう〜」としんどそうな呻き声^{うめ}をあげてから、お腹をかかえて先ほどよりますます青い顔をしてよけいにぐったりとした。

美弥はそんな彼女を嬉しそうに眺めている。

「のお〜〜しんやあ〜〜」

「どうした？ まだなにか食べたいものがあるのか？」

「たしかに美弥の料理はうまいが、今はもうよい。それよりも透明で冷たい飴の入った飲みものと、世界^{うつつよ}が欲しいかのお〜〜」

学園で言っていたアレか……。だが一口に世界征服といっても、お菓子を買ったついでに付いてくる食玩を手にいれるようなノリで世界^{うつつよ}は手にはいらないと思うぞ。

「『見返す』とか言ってたけど……。具体的に何をどうしたいんだ」「うむ、よくぞ聞いてくれた」

待ってましたと言わんばかりの勢いで話を続けた。

「まだ魔王達^{わらわ}が現世^{うつしよ}を統べていた頃の話じゃ。わらわは四つの島からなるこの大和の半分を統べる魔王じゃった……」

「え〜」

思わず疑問の声が口をついて出た。

「う、うるしやい！——コホン。ともかくあの頃は他の魔王もわらわの強大な力に恐れをなして、手を出すどころかわらわに足を向けて寝ることもできなかったのじゃ。じゃから奴らを見返し、力を誇示するためにてっとりばやく世界征服するのだ！」

言い張る彼女だったが、半分とか足を向けての部分はかなり怪しいところである。

「はい咲耶さん。氷の入った飲みものです」

先ほどの要求の片方をこれで満たしことになる。

魔王様に捧げられた飲みものからは、じゅわじゅわと泡が吹きだしていた。あれは冷蔵庫に入っていた○イダーだと思う。

熱くもないのに泡が出ている不思議な水に、咲耶は身を乗りだしてひどく興奮している。

美弥はこのあと起こるであろう出来事に息を荒くして、期待の眼差しを向けている。

ごくろ……。

「ぎゃあああああ！」

——そんな咲耶を尻目に、俺は和室での一件を思いだしていた。咲耶の不思議な柏手とそれによって起こった魔王の御業。

口からサ○ダーを吐きだし、悲鳴をあげて部屋の中を走りまわっている彼女がその気になれば、俺の知っている人間の世界を征服するという漠然とした内容の夢物語が現実のものとなってしまうかもしれない。

もしかしたら俺が咲耶に冗談のように言った一言で、世界が滅ぶ。自覚してしまうとちょっとだけ怖くなってしまう。

ひいひい言いながら戻ってきた彼女を見てしまうと、そんな考えは杞憂だったかもしれない。そう思える。

しかしながら、一連の騒動を悦とした表情で見ている美弥だけは怒らせちゃいけないと確信した。

「ぬわんじゃこれは！　口が焼けてしまったかと思ったぞ！」

「サイ〇ーってのはそういう飲み物なんだよ。慣れるとそれが癖になったりするんだ」

「もう大袈裟よ咲耶さん。そうだ、今度はこれを使ってみたらどうでしょう」

そう言って取り出したるはストロー。サイダ〇のコップに入れると氷が心地いい音を響かせた。

「なんじゃこれは？」

「これを吸うとですね、なんとその下の飲み物を飲むことができるんです」

咲耶は先ほどの失態を払拭するかのよう、無駄に尊大な態度で言う。

「ふふふ……、美弥よ。いくらわらわが現世うつしよに疎いからというてもそのような世迷言を信じるわけがなからう。……よろしい。そのような絵空事など無いことを、我が身をもって証明してやろうではないか」

自ら断頭台に立った彼女は、神妙な面持ちでストローに口をつけ、――思いきり吸った。

「ぎゅああああああ！」

一切の遠慮なしに吸いあげられた冷酷な炭酸は口内の奥深くまで侵食し、その幼い柔肉に執拗しつようなまでに鋭い刺激をあたえる。

「ああああああ！」

いたいけな子羊は痛みの矛先をもとめ無自覚に彷徨さまよいだす。

「おおおおおっ――ッ！」

逃避行を続ける爪先が立ち塞がる壁に激突する。

「ふんぎゅあ、へぶちっ。」

這い上がってくる雷いかずちの如き衝撃に、制御を失った幼体は無様に地を這った。

「ひぎゅ、ひぎゅ、ひぎゅ、——」

もはや絶え間なく押し寄せる鈍痛を耐え忍ぶしかない。

つまりストローで思いきり吸った炭酸に驚いて暴れまわり、足の小指をぶつけた拍子に転んだわけだ。さすがにこれは同情せざるをえない

そんな原因を作った張本人である俺の妹は、聖母のような慈愛でもって悲劇の魔王に優しく手を差し伸べた。

「——咲耶さん。痛かったですよね、苦しかったですよね。でももう大丈夫です」

「みやあ、うわわわわわああん」

ぴったり抱き合って労わり合う二人。

悲しんでるいる咲耶に、嬉しそうな美弥。これじゃどちらが魔王だか判らなくなってきそうだ。

ぐずぐず泣いている子羊に、聖母美弥が頭を撫でながら優しくほのめかす。

「痛いのは治りましたか？」

「うん。ありがとうみやあ。おぬしのおかげなのじゃ」

いや、そもそも事の発端は……。

「咲耶さんも人にいっぱい感謝されるような、立派な魔王様になりましょうね」

「そ、そうしたら、わらわはこんな辛い目にあわずにすむのじゃろうか……？」

「ええもちろんです。そうなたらみなさん咲耶さんのことを可愛がって、世界征服だって出来てしまうかもしれませんよ」

「——っ！ わかったのじゃ……。わらわの進むべき道が、見えた気がするのじゃ……」

どんな道なんだよ……。果てしなく険しそうだな。

「どうやったら立派な魔王になれるんだ？」

ため息混じりに聞いてみる。

「兄さん、ボランテティア部なんてどうでしょう？」

「なんなのじゃ？ それは」

「世の為、人の為になる事をする所ですよ」

こうして、ボランティアで世界征服への幕が切って落とされたのである。

征服のススメ（後書き）

○イダーを使って咲耶にかわいそうな事をしてしまいました。

お風呂―Caution―(前書き)

この部は、ここまで呼んで戴いた方のお礼と試験的な意味を込めまして、完全なサービス回となっております。内容としてはお風呂には入っただけです。どの部も伏線や後々に繋がる様な内容であるのに対して、この部を読み飛ばしても全く一切影響が無い内容にしたつもりです。さらに付け加えると、この作品はR-15指定でも無い為にそれっぽい描写もありません。が、しかし！内角ギリギリいっぱいを攻めて行くつもりです。ご理解のほどをよろしく願います。

お風呂―Caution―

前書きにある通り咲耶と一緒にお風呂に行ってくるぜ♪

「咲耶さん、そろそろお風呂に入りませんか？」

美弥が唐突に言い出してくれた。(gJ)

「な、なんじゃ美弥よ。藪^{やぶ}から棒に」

「だって咲耶さんあっちこっち汚れてしまっています。そんなことでは立派な魔王になることなんて出来ませんよ」

「わ、わらわのようなやんごとなき身分の者に、そ、そ、そのようなことは、か、関係ないのじゃ！」

おかしい……。今日一日中落ちつきのない咲耶だったが輪をかけて浮き足立っている。これはなにかあるな。

「そんなことを言っていると兄さんに嫌われてしまいますよ」

「――ッ！」

その一言にわずかに反応した彼女は泣きそうな目でこちらを伺う。

「の、のお信弥よ……。そ、そ、そなたは、風呂に入らぬわらは……、嫌いになると申すか？」

俺は瞬時に思考を張り巡らせた！

(この様子から察するに咲耶はやはり風呂が嫌いなのだろう。魔物――咲耶は魔王だが、に風呂に入る習慣どころか獣のようなものを連想する魔物という言葉の響きから身嗜^{みだし}みなどという概念があるかさえ微妙だ。桜の前であつたときもお世辞には綺麗とはいえなかったし。考えてみれば大昔には風呂に毎日入るなんて習慣はなかったはずだ。さすがの魔王だけあってそれなりには小奇麗にしてみたのだが。それを踏まえて、もしここで「そんな事は無い」と言った場合はどうだろう。直前の会話から鑑^{かんが}みるに咲耶は俺の意見を重視するだろう。風呂が嫌いであろう彼女のことから俺が入らなくても気にしないと言えは恐らくは入らないだろう。しかしそのような事態になつては前書きで読者様に宣言したことが果たせなくな

ってしまわないか！ もはやこの答えはあえないな、論外だ。
俺的にも一日中騒いで埃まみれの巫女服でべたべたされるのはちよつと遠慮したい。まあこんなことは解り切っていた事だろうしアレだけ前置きしておいたにも関わらず今現在この箇条書きを目で追ってる読者様にもそのような事を期待される方は誰一人として居ないであろう、と俺は確信している。では「気にする」とした場合だ。というか「気にする」と言います。そうでなくては始まりません。ではなにが問題かという俺が男で咲耶は女？である事だ。？なんて付けてはいるが別に咲耶が女であることを疑っている訳ではない。ただ俺は咲耶は人間ではなく魔王様であると言うことを表現したくて？を付けたのだ。敬虔けいけんである大変ありがたい読者様にはなにを今更と言われるかも知れないが咲耶は美少女である。私の拙い表現力で出来るだけ精一杯に描写していたつもりである。何度も可愛い可愛いつて言ってきた。しかもロリっ子なのである。しつかりロリっ子なのである。大事なことなので二回言った。さらに巫女装束でリアルではありえない銀髪ロングで二次元だからこそ許されるドジっ子と魔王というテンプレ的属性を持つスーパーヒロインなのである。ここまで書いて作中での咲耶に対する好き好きオーラがちよつと足りない気がしてきたので次からは気をつけようと思う。なにが言い良かったかというと、――咲耶とお風呂に入りたい。……ちよつと興奮してしまったが話を元に戻そう。つまりだ、俺と咲耶は性別が違うワケ。それがなに？って思われるかもしれないがとても致命的である。なんといつても我が家には良く出来た万能妹が居る。そんな彼女がロリっ子とお風呂なんて許してくれると思うか？いいや、おれは思わないね。だから素直に「気にする」と言ってはダメなんだ。解ってくれたかな？ さて、そこでどのようにしたら美弥を納得させてロリっ子と一緒に風呂に入れるかという話に戻そう。ここで注目すべきは咲耶は俺のことをすごく意識してるって事だ。これを上手に料理して美弥を納得させた上で悠々自適にロリっ子のお風呂を楽しむというのをベストな結果として考えていきたい。な

んなら美弥と一緒に3Pでも俺はかまいませんよ？ そうだな……咲耶とのお風呂は公約しているので需要あるわからないがこの小説が掲載されている間に無理だと思うがお気に入り登録が二百人いったら記念として美弥との子供の頃のエピソードを書き下ろそうではないか。勿論一緒にお風呂に入るシーン＋アルファを入れて。不正とか露骨な宣伝とかはやめてくれよ。そんな価値もないと思うが。忘れてるかもしれないからその時はだれか指摘してくれ。まったくの箇条書きなので話が飛んで申し訳ないがどうしたら咲耶と、って事だったな。俺も今から考えるぞ。———こういうのはどうだろう。咲耶から俺と入りたいと言わせるのは。これなら俺がしょーがないな——って言いながらキャッキャうふふできると思わないか？ 俺から言い出せない以上そうするしかあるまい。じゃ具体的になんと言おうか。ここで咲耶の気持ちになって考えてみようじゃないか。咲耶は俺と一緒に入りたいはずだ。まちがいない。じゃ俺もそれを勾よわせるような発言をしたら咲耶の方から誘ってくれるのではないか？ 完璧じゃないか？ よしこれでいこう。でわ具体的にこういうのはどうだろう。「やっぱりにしちゃうかな……。咲耶の長くて綺麗な髪がもったいないよ。俺がお手入れしてあげたいくらいだ」ぶっつけ本番で考えた割にはけっこういい線をいってないか？ 直接言う訳ではなく、それでいて咲耶と一緒に居たい。面倒を見させて欲しい。髪を洗いたい。お？ お？ じゃこれでいきます！ てか本丸残ってるのにこれ以上考えたくない。いくよ？ じゃーこれで逝きます。）

———嘗てないほどの脈動を見せた俺のシナプスが時空を超え、俺は一つの未来を導き出した。其れを俺は提示しよう。

「やっぱりにしちゃうかな……。咲耶の長くて綺麗な髪がもったいないよ。俺がお手入れしてあげたいくらいだ」

よし、言っちゃった！ 完璧。後は二人がどう出るか……。

「う、うむ。わらわもこの長い髪は自慢なのじゃ。し、信弥がそのように思ってくれていたのは、なんだか恥ずかしいの」

「もう兄さんったら。でもその気持ちもわかります。咲耶さんの長くて艶のある綺麗な銀髪は女性の私から見ても憧れてしまいます」
美弥は咲耶の長い髪を手櫛で整える。咲耶は上機嫌だ。

「な、なあ信弥よ。そんなにわらわの髪を気にいったのなら……。
い、いっしょに——」

キタ——（◇。◇）

これで勝つる！

が、しかし。

「————ダメですよ咲耶さん」

「——ッ！」 「——ッ！」

俺は青い顔をして、咲耶は赤い顔をして。この家の裁定者であり、執行者であり、断罪者である美弥の次の御告げを待った。

「兄さんものです。二人でお風呂なんて言語道断です。見過ごす訳にはいきません」

なんということだ……。でも薄々こうなるんだろーなとも思ってた。桃源郷には誰もたどりつけないのである。

「しかしですね、咲耶さんが一人でお風呂というのは色々心配ではあります」

——え？

絶望の暗闇の中から、一筋の光が差し込むかのように——。

「ですので私が咲耶さんと入ります。——さあ一緒にお風呂に行きましょう」

終わった。まさにオワッタ。俺の聖戦は終わりを告げたのだ。無駄にキーボードを叩いただけだったのだ。たたいただけだったのだ。た、が多い。

おれはこうして戦いに敗れ去った。

視界が暗転する。

そう、俺の役目は終わったのだ。

みんなを理想郷に導くことが出来なかったふがいない俺を許してくれ。

後は…………。

——「咲耶さんの巫女服は、なんというかすごいですね」

美弥は咲耶の着ている巫女装束をあらかた脱がしきった。

「これは手洗いしないといけませんね。生地の量も多いですし……。乾かしている間は申し訳ありませんが咲耶さんには私が昔着ていた服があったと思うのでそちらを着ていただくことになるかと思います」

脱がしている最中の咲耶はまるで借りてきた猫のように大人しくしていた。これから起こるであろう苦行を想像しただけで身の毛がよだつ思いだった。

実際彼女の柔らかくきめ細かい肌に似つかわしくない鳥肌がぽつぽつと出来ている。

「もう咲耶さんそんなに緊張しないで下さい。私まで緊張して来てしまいます」

「し、し、しかしじゃな。わらわといえども、こ、こ、こ、このようなことは、なれておらぬゆえに——」

「私が一緒ですので大丈夫です」

どこが、とは言わないが色々^{あらわ}と貧相な魔王の生まれたままの姿を露にさせた美弥は今度は自分の番とばかりに上着に手を掛け一息に脱いだ。

どこが、とは言わないが脱ぐ際に上に引っ張られたものが重力に従って落ちていく。その反動で自然の摂理に逆らい上へ、そして下へ、リズムカルにバウンドする。位置エネルギーと運動エネルギーの交換が収束していく。

その一部始終を見上げていた咲耶の顔は敗北の色に染まってその揺れと同じ軌道を描いていた。

前屈みになり極端に布面積の少ない服を外すと咲耶の自尊心はズタズタに切り裂かれた。

「咲耶さん、こちらをじっと見ていたいどうなさったんですか。恥ずかしいのであまり見ないでください」

腕を胸の前で組んで身をよじる。

咲耶は失格していた。試合は始まってもしなかった。諦める以前に同じコートにすら立たせてもらえないのである。

なにが、とは言わないが大きいほうがべったんこの手を引いて桃源郷へと足を踏み入れる。勇者が探し求めた理想郷アルカディアの地だ。

浴槽のふたを取ると熱を孕む湿気があたりに立ち込めた。夜はまだ肌寒い季節。お風呂場の二人の白い肌を心なしか暖めてくれた。

「まずは掛け湯をしなくてはいけません。こちらへどうぞ」

「う、うむ。そ、そつとじゃぞ。そつとやるんじゃぞ。よいな」

「ふふ、わかっていますよ」

つるん、とした体の、つるん、とした肌に生暖かいものがかけられていく。

「——はあうん。あ、あ」

「はい我慢できましたね。次は反対側ですのてくるつとまわってください」

言われたとおり薄い体を回れ右させるべったんこ。もちろんなにが、とは言わないが。

滝のような掛け湯が終わった。今度は自分自身にお湯を掛ける。

天界の湖や下界の林もなんのその、山を越え、谷を越え、冷えた体を温める。

「それでは入りましょう」

美弥は咲耶の小さな手を取り大海へと優しく導く。

すらりと長い脚が片方だけ優しくそつと差し入れられる。続いて短く細い脚がおっかなびっくり海に沈められるが海底まで届かない。波打ち際で尻餅をついてしまう咲耶。美弥はそれに合わせる様にして海沿いに腰を下ろす。

その姿はまるで鳥取砂丘と松島であった。二つの全く違う大和風景が一つの海岸線に姿を見せたのだ！

松島には豊かな自然が広がりとわかに実った果実がある。そこでは桃やメロン、イチゴが実っている。一方の鳥取砂丘には、——な

にも無い。

鳥取砂丘といわれている所は実はそんなに広くない。小さいのだ。さらにいうと砂丘というだけあって一応の起伏もちゃんとある。よかつたね。もつといえは長芋なんかは有名な特産品だったりする。

砂丘の畑に行けば長芋が埋まっているんですよ。長芋が――、砂丘に――、埋ま――。

松島は砂丘の手を取ってゆっくりと湯船に浸かる。

目を閉じてじっと耐える咲耶を美弥は両手で優しく包みこむ。

「咲耶さん、そんなに怖がらないでください。私がついていますよ」
素直に腕の中に抱かれた彼女はここに来てようやく落ちつけた気がした。

――全身を包む暖かな流れに身を任せる。

「うむ、風呂というのも存外悪くないの。美弥がどうしても言うならまた入ってやらんでもないぞ」

「はい、その時はおねがいします」

お風呂―Caution―(後書き)

長くなってきたので、キリのいいところでやめてしまいました。
ごめんなさい。

サービス？回はこれでしばらくお預けです。

私の内角球はストライクだったでしょうか、ボールだったでしょうか、デットボールなら勘弁してください。

どちらにしてもここまでで、あらすじの内容は一応の終了となります。

だがしかし、ロリっ子魔王の物語はまだ始まったばかりです。

果たして咲耶は、世界征服を成し遂げることが出来るのでしょうか。なんとなく流されっぱなしの信弥君を待ち受けているものとは。

魔王も手玉にとってしまいう美弥とは何者なのか。

そしてあからさまに何かありそうなボランティア部。

学校で待つ新たな出会いとは。

松島と鳥取砂丘が分らない人はググって見よう。

このくだりは個人的に改心の出来だったと思います

同衾（前書き）

兄さん、大すきですよ。

同衾

俺と美弥は揉めていた。いや、正確には咲耶と美弥が揉めていた。話は十分ほど前に遡る――。

俺は風呂で一日の汗と疲れを洗い流す。紆余曲折あって俺が二人の後に風呂に入る事になった。

俺としては咲耶と裸と裸のお付き合いをしてもよかったのだが、世の中そんなに甘くない。

現実 is 厳しいのだ。

いつもより少しお湯の減っていた浴槽に悔しさを覚えつつ手早く体を洗う。

――リビングへと戻ってきた。

「おかえりなさい、兄さん。お湯加減はいかがでしたか？いつもより残ってるお湯が少なかったかもしれません……。大丈夫でしたか？」

「悲しみの涙と深い絶望に肩までゆっくりと浸ることができたよ」

「……？」

美弥はいつもの白い布地に赤いチェックの柄が入った、特徴が無いことが特徴のパジャマ。だが良く出来た妹が着たパジャマというのは、それだけで理屈ではない超自然的な価値がでてくる物なのである。

それはそうと、もう一方のちびっ子が着ているあれはなんだ？ぶかぶかのYシャツ、だと……。似合いすぎだろ……。まさか美弥がこのようなチョイスをしてくるとは。よく解っていらっしやるじゃないですか。

リビングのソファで大人しく座っている咲耶のしっとり流れ出る銀の絹糸のような髪を美弥は櫛で丁寧に紡いでいく。

春の夜陰に少しだけひんやりとした静かな空気の中、髪から伝わる美弥の暖かさを感じてか咲耶はこくりこくと舟をこいでいる。そんな二人を横目に見て、冷蔵庫からよく冷えたじゅわじゅわ泡の出ているアレを取りだし風呂あがりの熱く火照った体に流しこんだ。

「——んぐ、——んぐ、——ンぷはあ！」

弾けるような快感がのど奥を突きぬけて暴れまわる。生き返るとはまさにこのことだ。

「もう兄さんったら、だらしないです。もう少し上品に飲んでください」

しょうがないですね、といった感じの我が妹の意見はもったいもあるが、こういうのはなかなか止められない。

兄妹のいつものやりとりで目を覚ましたお姫様は俺の姿を確認すると、こちらに近よってきて体にしなを作り言った。

「どうじゃあ信弥よお。高貴なるわらわの美しくも艶やかなこの姿は」

どう、って……。その流し目が痛々しいです。

うつふんとか、あっはんとかされても正直反応に困る。もう少し大人になってから……——ん？

咲耶が前かがみになり、頭部とヒザに手を当てながら胸部の洗濯板を強調していた時。

気づいてしまった。

ぶかぶかの白い聖衣の襟元えりもとからのぞく小さな桜の花びらを。

「お、おとお……。——か、かわいいんじゃないかな……」

嘘は言っていない。声がちょっとだけ上ずった気もする。

「むーん。そーではない。わらわがかわゆいのは解りきっておるのじゃ。今は我にこーふんするのかと聞いておるのだ」

「——す、するする。こーふんしちゃうかなー」

「おお！　そうかそうか。では思うぞんぶんわらわで楽しむがよいのじゃ。ほれ、——それ、——これでどうじゃ。——こんなのもあ

るぞ」

のりのりでくねくねする咲耶を上から覗きこむようにさりげなく、ごくさりげなく移動する俺の行動に対して敏感に何かを感じとった美弥が待ったをかける。

「咲耶さん。明日は朝から学園に行かなくてはいけないのですからもう寝ましょうか」

チッ！ と心の中で舌打ちをする俺。さすがよく出来た妹は勘も鋭い。

「そうか。でわ信弥よ、そなたの床に案内するのじゃ。わらわもそこで寝ようぞ」

一瞬何を言われているのか理解できなかったが……。そうか、そんなイベントも残っていたんだな。俺も君とおねんねしたいと心から思うぞ。別に変な意味じゃなくて。だがな咲耶よ、東條家において物事を決定するのは俺じゃないんだ。

「そうだね、一緒に寝ようか。ついておいで咲耶」
「うむ！」

「……兄さん？」

いつも誰にでも分け隔てなく向けられる柔らかな微笑み。人の心の中にするつと入っていく、そんな笑顔をしている美弥の、そんな彼女の目は、――笑っていなかった。

「ウソデス、チョウシニノリマシタ」

「はい。兄さんは冗談が上手いです。咲耶さん、今晚は私と一緒に寝ましょうね」

「えー、今しがた一緒に寝るって約束したのじゃ」

「だめです。咲耶さんを兄さんに預けるわけにはいきません」

「いやじゃ！一緒に寝るのだ」

「いけません。兄さん、いいかげんにしてください」

「何で俺が……」

「元はといえば兄さんが――」

「信弥と一緒に寝るのじゃ！」

――とまあ、こんな具合だ。

俺はこうみえて聞き分けがいい。ちゃんと判っていた。すこしだけ調子に乗ってしまったが、もう許してほしい。これ以上美弥の心を悪くするとなにが起こるか判ったものじゃない。俺だけ朝ごはん出てないとか普通にありそうで怖い。

「咲耶、今日は美弥と一緒に寝るんだ」

「むうーん。信弥までそう言うのか」

「兄さんもそう言っています。行きますよ、咲耶さん」

「んむう」

しぶしぶといった様子で咲耶はドナドナされていた。

美弥のあの様子から察するに、あしたの朝飯は無事であろう。口は災いの元とはよく言ったものだ。

しかし桜の花びらが見えてしまったのは役得だったな。下着がないのは仕方ないか。……ん？ 上は無かったのは確認したが下はどうだったんだろう。も、もしかして……。――な、なんてな……。まさかそんなことがあるわけがない、よな？

さて……。俺もそろそろ寝ようか。

今日はいろいろあった。魔王がいきなり現れて、俺のご先祖様が勇者で、世界征服だ。親父とお袋は急に海外旅行に行ったし臨死体験もしたっけな。あれは衝撃的だった。

だがこんな日常も悪くない。咲耶とならこれからも楽しくやっていけるだろう。たぶん……。

先に部屋に行った二人の後を追いかけるように二階の自室へと向かう。

だが俺の部屋の前には美弥が仁王立ちしている。

その表情は闇に融けこむようにして窺^{うかが}い知ることが出来ない。

「兄さん。いったいあれはどういう事なんですか。納得のいく

説明をおねがいします……」

美弥が指差す方向は二階の物置。はて……、あそこには和室の荷物を運んだだけだったが。

うなが促されるまま物置の中を覗き込むと、ダンボールの中身がそこらじゅうに散乱してそれはもうひどい有様だった。

「たしかに和室の荷物整理をおねがいました。でもこんなに乱暴に扱うなんて見損ないましたよ、兄さん」

「え……、でも確かにしつかりと積み上げておいたはずなのに」

そこまで言うってから俺は嫌な予感がして、床に転がっている中身がまだ出ていないダンボールの重さを確認してみた。

「——ッ！」

重い。いやいや、本来ならそれが正常なのだがこれは魔王さくやの御業によって軽くなったはずじゃ。

俺と咲耶はただ運ぶだけではつまらないので、途中からは箱を投げて遊びながら運んだり、物置の中でどれだけ高く積めるか咲耶と競いあったりした。もちろん身長のある俺の圧勝だったが。いや、今はそんなことよりこの惨事がいったいどういうことなのか。

そこで俺は、美弥の部屋から顔だけ出してこちらを覗いている共犯者を見つけた。

「すまんの信弥よ。あれは時がくれば元に戻るのじゃが、言い忘れておったわ」

——パタン。

言い終わると、静かに部屋のドアを閉め、それっきりだった。

裏切りやがった……。さすが魔王だ。こんなに汚いやつだと思わなかった。

だがうちの妹にそんな事情は全く関係ない。

「咲耶さんも悪いかもかもしれませんが、これはちゃんと確認しなかった兄さんの責任です。後片付けが終わるまで寝てはいけませんよ！いいですね、兄さん」

「え、あ、あの、ちょ……」

言い訳する間もなく部屋に戻った美弥。その表情は最後まで判らなかった。

明日の朝飯、俺の分はあるのかな……。

———咲耶さんは私のベットの途中で丸くなっていました。

私もその可愛い魔王さんの隣にお邪魔します。

彼女はじっとして動きません。きっと怒られると思っているのかもしれませんね。

でも私はこらえていた笑いをこれ以上隠し切れませんでした。

「うふふふ、あははは」

彼女はようやくこちらを振り返り、私の顔をうかがいます。

笑っている私を見て、咲耶さんは正直に話してくれました。

「あれはわらわが信弥と一緒にやったことなのだ。わらわも悪かったのだ」

半分泣きながら告白する彼女が可愛いのでつつい頭を撫でてしまいます。

「話していただきありがとうございます。初めから判ってましたよ。でも兄さんにはお仕置きが必要なんです。これに懲りて反省するといいんです」

私が怒ってないことがわかった、彼女はお布団の中をもぞもぞとこちらに移動してきました。

抱きしめられてしまいます。

「……暖かい。こうしていると昔を思い出すのじゃ。美弥よ、今日はずっとこうしていてもよいか？」

「はい。わたしもなんだか懐かしい感じがします。今日はいっぱい甘えてください」

「うむう………」

私の胸の中で眠る小さな魔王さん。可愛らしい寝顔をこちらに向けてやすやすと寝入ってしまいました。私もこの子の寝顔を見ていると安心してしまいます。

物置からは兄さんの後片付けの音がわずかに聞こえてきます。

あれだけ散らかっていたのにぜんぜん音がしてこないのは兄さんが気を使ってくれているからなのでしょう。

少し可愛そうなことをしてしまいましたが、兄さんは甘い顔をするとすぐに付け上がってしまいますからこのくらいが丁度いいのかもしれません。

なんだかんだ言いつつ、優しくて素敵な――自慢の兄さんです。
おやすみなさい。兄さん、咲耶さん。

初登校（前書き）

違うぞ、待ってくれ。誤解なんだ、信じてくれ！

初登校

俺は朝食を食べている。

それ自体はごくごく一般的なことかもしれない。だが俺にとっては栄養摂取という名目以上に、美弥様のご機嫌というかけがえの無いものを大根の漬物と一緒にバリボリと噛み締めている。

今日から学園の通常授業が始まる。

いつもは憂鬱だった毎日が、長い休みが開ける頃には楽しみになつてしまうから不思議だ。

「咲耶は今日から学園に通うんだろ。これからどうするんだ？」

「秦宮先生から連絡を頂いています。いろいろな準備があるそうなので、少し早めに学園にいらしてほしいとの事です」

「学園とは何をするところなのじゃ？　わらわにも教えてたもれ」
もったもな意見を言う咲耶。

「みんなが集まって勉強するところかな。他には友達とご飯を食べたり遊んだり」

いざ説明しようと難しいもので、これ以上の言葉が出てこない。

「なんと、信弥たちは貴族だったのじゃな。道理でこんなに旨い物が出てくるはずじゃ。じゃが手伝いの者の姿を見かけぬが雇ってはおらぬのか？」

「ん？」

さすがに大昔の魔王様と現代っ子の俺ではカルチャーギャップがあるのだろう。彼女の言っている意味がよく判らない。

困惑気味の俺に出来た妹が助け舟を出してくれた。

「私達は貴族なんかではありませんよ。学園には大勢の方が通っていらつしやるので、特別なことではないんです。ですので、お手伝いさんも居ません」

なんとなく納得したような咲耶。今は朝食に夢中なのか、それ以上深く追求しては来なかった。

俺と咲耶は先に家を出る。

咲耶は綺麗になった巫女服に身を包み上機嫌だ。

最後に戸締りと火の元の確認をしてきた美弥が出てくる。

「お二人ともおまたせしました。では学園へ行きましょうか」

学園へと向かう道のりで、同じ方向へとむかう方々は咲耶の愛くるしい姿に目を奪われていた。

長い銀色の髪を揺らして歩く彼女は注目の的だ。朱と白の巫女服もかなり目立だっておりコスプレと思われるも仕方ないだろう。

早い時間に出てきて正解だった。

そんなことを知って知らずか。道中相変わらずなにかにつけてべたべたしてくる咲耶だったが、人通りが多くなると急に大人しくなってくれた。

学園に入るなり、そのまま一直線に職員室に滑り込む。

二年学年副主任である秦宮真理子先生が俺たちを迎い入れてくれた。

「よく来たね。それにしても結構目立ってたじゃないか。よ、有名な人！」

「やめてください。教室に行ったらなんて言われるか……」

「あはははははっ。でもまあこんな小さくて可愛い子を連れているんだから少しくらい我慢しなさいな。じゃ早速用意してある制服に着替えてもらおうかな。美弥君も手伝ってくれたまえ」

職員室の中に併設された、給湯室と書かれたプレートが飾られている個室に二人を案内する秦宮先生。

当然のように三人の後を付いていく俺。秦宮先生と美弥が一緒に振り返り、ジト目で呆れたように言う。

「あんたね、さっきの話を聞いてなかつたのかい？ まったくこんなことじゃ美弥くんも相当苦労させられてるんだらうね」

「そうなんですよ先生。兄さんのデリカシーの無さには困ってしま

います。いいですか兄さん、私達はこれから咲耶さんを制服に着替えさせるのですよ。そこに兄さんが居ると着替えさせることが出来ないじゃないですか」

「そういうことだ。ここはもういいから、あんたは先に教室にでも行って大人しく授業の予習でもしてな」

放り出されるようにして追い出されてしまった。これ以上ここにとどまっても仕方ないので、重い足取りで教室へと向かう。

そして案の定、こんなに早く来ている物好きのクラスメイトたちに質問攻めにされた。

「ねえ東條君あのちっさくて可愛い子は誰なの？」「あの巫女服はコスプレなの？」「おい東條君てめえ今朝のあれは何だ」「もう一方のスタイルいい子も東條君のコレなの？」「え、なにそれ二股？」「やだ、東條君さいてー」「爆発しろ」「すごい可愛いかったよね」「あの子は知り合い？」「東條君って大人しそうな顔して意外とやることはやってるのね」「あの子紹介してよ」

ひどい言いようである。

とりあえず一緒にいた妹のことは言っておいたが、咲耶のことは言葉を濁してはぐらかした。

「神様です。いいえ、国際的には魔王なんです」なんて言ってみろ。

この場にいる全員を白い目にして黙らせる自信がある。だがこれからの学園生活のことを考えると上策とはいえない。

それに咲耶をどのような扱いにするのかを全く聞かされてなかったのだ。

下手なことを言って話が食い違いでもしたら後々面倒だからこうするしかなかったのだ。

最も肝心な俺と咲耶の関係をはぐらかしながら適当な返事ばかりする俺に、クラスメイトはますます質問を浴びせ続ける。

一番後ろの席だった俺の周りには容赦なく人が詰め寄っていた。

ほとほと困り果てていたときに、救いの女神が手を差し伸べた。
「みんな、東條君が困ってるじゃない。それくらいにしてあげましよう」

大人しそうでいながら凜とした瞳ではっきりと訴える彼女は、腰まである長い髪を揺らしながら人ごみを掻き分けて進んで来る。

童顔ではあるが清楚な感じのする整った顔をやや歪ませて、ようやく俺の座っている机の前までどうにかしてやってきた。その動作の一つ一つに気品が感じらる。

そのままの勢いであたりを一睨み利かせる。すらりと伸びた腕を払うように動かしてから、改めて言い放った。

「もうすぐH Rが始まりますよ。皆さんは席に着いてください。はい、散って、散って！」

彼女が俺の周りに群がる生徒の塊を徐々に追い払ってくれた。

まっすぐ切り揃えられた長い髪が目の前でゆらゆらと揺れて、ほのかに甘い匂いがする。

そうだ、彼女はクラス委員長だ。

あれは今でもはつきりと思い出すことが出来る……。

——どうしてこんな面倒くさいものを一番最初に決めなくてはいけないのかと、誰もが疑問に思うクラス委員長。

俺は無理。私は無理。誰かやれよ。

皆が下を向いてまるでお通やなにかのような空気の中において、颯爽と手を上げて立ちあがり立候補した。

その勇気ある行動に、静まり返ってきた教室はとたんに色めき立つ。

救世主が現れたぞ！

満場一致で承認された彼女の戴冠たいかんは、やかましいほどに鳴り止まぬ拍手でもって祝福された。

あえていうなら、俺などではなく彼女こそが勇者にふさわしい人物なのであろう。

当時の様子をT・S君が振り返ってくれた。

「もうだめかと思いました。誰もが諦めそのまま時間ぎりぎりになるまで座らされた挙句、悪魔のクジによって約1／40の確率でこの一年を先生方に奴隷のようにこき使われ、面倒ごとをまる投げされて、あだ名は強制的に『委員長』になる。そう覚悟しました。ええ、もちろん私もそう思っていましたとも。でもそんな時に女神……。そうですとも、まさに女神です！女神がこの絶望の暗闇の中から我々を救い出してくれたのです！私達は盛大な拍手で彼女を讃えました。長く美しい黒髪を伴って壇上へと上がる彼女からは後光が見えたような気さえます。あまりの美貌と気高い品格に目が離せなかったですね。彼女のおかげで他の委員決めも時間内に滞りなく終えることが出来ましたよ。そのあとの妹との待ち合わせにも遅れずに済んで、彼女には本当に感謝しています」

——こんな声もあるくらいだ。

名前は覚えてるぞ。戴冠式のとくに調子に乗った男子どもが彼女の名前を連呼していた。

当の本人は顔を真っ赤にしながら必死に「止めてっ！」と叫んでいたが。

たしか——《しおり》だったかな。

あれだけあった人垣が俺の周りからすっかり無くなったのを確認すると、例の女神が話しかけてきた。

「大丈夫だった？ 東條君。みんなはすぐ調子に乗るんだから、まったく困ったものよね」

「ありがとう。おかげで助かったよ、しおりさん」

「あら、話したことも無いのに『しおりさん』だなんて……、ずいぶんと馴れ馴れしいのね。もしかして女の子の扱いに慣れているのか？ さっきの二股ってのも案外本当なのかもしれないわね」

「ごめん……確かにその通りだったかも。でも苗字を思い出せなかったんだ」

「みんな『委員長』って言ってるのだから、あなたもそう呼んでかまわないのよ？ やっぱり女の敵なのね。注意しとかなくちゃいけないわ」

からかうようにして言う彼女に降参するようにして手を上げる。

そんな様子の俺を楽しそうに観察していた彼女は、どきりとするような怪しい表情を浮かべた顔を急に俺の目と鼻の先まで近づけて俺にだけ聞こえるような声で囁いた。

「冗談よ、あなたとはもっと親しくなりたいと思ってるの。……本当よ？ だってあの魔王様のことだってあるじゃない？」

「――ッ！」

ゆっくりと、顔を離れた彼女は嘲笑うかのような顔とコロンの香りを残して自分の席へと戻っていく。

唐突に言われた『魔王』という言葉と残り香にドキドキしてしまい、黒く長い髪が揺れている後姿に声を掛けることができなかった。そこにタイミングよく先生が教室へと入ってきてしまい、彼女に話を聞くタイミングを完全に逃してしまう。

どういうことだろう。なぜ彼女は咲耶の正体を知ってるんだ。

考えても堂々巡りで答えが出るはずも無く、先生の話が頭の右から左に流れていくだけだった。

「じゃーみんなお待ちかねの転校生を紹介するぞ」

先生の一言で我に返った。教室に歓声が沸き起こっている。

咲耶は俺のクラスに編入するとは聞いていた。無難に転校生ということだが一体どうなることやら。

「判ったからお前ら落ちつけて。いいか、彼女は帰国子女で日本のことはあまりなれていないそうだから、何か分からないことがあったら優しく教えてあげるんだぞ」

『彼女』という言葉聞いて、転校生が今朝の少女ということが確定してますます騒ぎ出す野郎ども。女子もそれに便乗して転校生について話している。

「お前たち、こんなにうるさいと転校生を呼べないだろ。さっさと

黙りなさい」

——その瞬間ピタリと騒ぎが止んだ。素晴らしい一体感だった。そんな様子に半ば呆れ気味の先生は、教室のドアの向こうに居るであろう転校生に向かって声を掛けた。

「じゃあ玖珂君、入ってきなさい」

そう先生が言い終わると、静かに教室の前の扉が開いた。

——開いた。

——開いたが……。

真新しい制服に身を包んだ咲耶が登場し、教壇の前までやってきて、自分の名前を慣れない手つきで黒板に書いて、よろしくと言う。そう思っていた。

だがいつまで経っても開いた扉からは誰も現れない。

何事が起きたのかと小さくざわつき始めた教室。先生も額に手を当てて困った顔をしながら開きっぱなしのドアの向こうを見ている。そしてたっぷりと時間をかけてから、ついに銀色の髪の頭だけがドアからよきつと生えた。

やっぱり咲耶だ。

長い銀髪を垂らしながら、ゆっくりと首だけ出して教室の中を窺^{うかが}う。咲耶は今にも泣き出しそうな顔をしていた。

そして教室の後ろにいる俺の顔を確認すると、なんとも魔王らしからぬ情けない声を出して言った。

「し、しんやああゝゝ。ひつく、ひつく。しんやああゝゝ」

言い終わるとドアの向こうに引っ込んでしまう。

その様子を目撃したクラスメイト達は言葉を失ってしまった。

唐突に後ろのドアが開けられ、そこから咲耶が制服の袖で顔を隠しながら俺に向かって走ってきた。

俺の胸の中に顔をうずめて小さくなる。

そこまではいいのだが、俺の制服で顔から出てる液体を拭くのはやめてほしい。

「そんなわけで見ての通り、玖珂君は少しばかり人見知りのようで

な」

そういえば咲耶は人通りが多くなってからやけに大人しくなっていたな。学園に来る頃には存在自体が希薄だった気もする。

思い出してみれば、最初に出会った時も、秦宮先生に呼び出された時も……。

——思い出した。咲耶は内気な性格だったはずだ。

昨日はずっと美弥と三人で一緒に居たから忘れてしまっていたが、咲耶はいじめられて？ 内気な性格になったのだった。

でもまさかここまで残念なことになってしまうとは……。

そんな咲耶の頭を撫でてあやしてやってるうちに、ふと気づいた。クラスメイト全員が突き刺さるような視線をこちらに向けている。

——やめて、痛い、痛い。

視線だけで人をここまで攻撃できるのか。

客観的に見れば、今朝一緒に登校してきた銀髪美少女転校生を抱きながら頭を撫でているのだ。気にならない方がどうかしてる。

だが俺は気づけなかった。冷たい目線のクラスメイト達が本当に言いたかったことを。

やがて静まり返る教室の中においてクラスメイトの一人が無情にも、だ가의確な表現で俺たちを描写した。

本人は小さく呟^{つぶ}いたただけだったのだろうが、静まり返った教室において全員の耳に届くには十分な大きさだった。

「——ロリコン」

ただ冷たかっただけの空気が一変して、氷雪を伴ったブリザードとなり俺に襲い掛かる。

違う！ 断じて違う！ 俺はそんなんじゃないんだ。信じてくれ……。

小さい子と抱き合ってる俺を委員長のしおりは面白そうにしながら見ていた。

信じていたのに。(前書き)

常に味方とは限らない

信じていたのに。

「この様子じゃ玖珂の面倒は東條に任せるとしよう。瀬川、席移動してもらってもいいか？」

「も、もちろんですよ」

隣の席の彼女がうなづく。

「ありがとう瀬川さん。ほら、咲耶もお礼を言いなさい」

「う、うん。あ、あり、ありが……とお」

「ごめんね瀬川さん。咲耶はちよつと内気な性格で――」

「ううん、いいの、ぜんぜん気にしてないよ、じゃ」

早口で言う彼女。

優しい子だ。

そう思った彼女の去り際の、あの……、汚い物を見るような目は、俺の人生の一ページにしっかりと刻み込まれた。

「これで話は終わりだ。お前ら、あまり玖珂をいじめるなよ」

HRが終わってからの咲耶は大人気だった。

咲耶のまわりには人が押し寄せ、矢継ぎ早に質問を浴びせる。

俺たちの間には見えない境界線がある。そこからは誰もはみ出さない徹底振りだった。

人だからからは、「大丈夫？」とか「何かされたりしてない？」

とか、すごく心配されていた。

ロリコンという言葉が頻繁に飛び交い、虐待とか、犯罪って単語も聞こえてくる。

そ、そんなんじゃないのに……。彼らが本気で言ってるわけではないと信じたい。

そんな騒動の中心に居る咲耶。

隣の俺が見えなくなる程にクラスメイトに囲まれているので、助けを求めることが出来ない。

背筋を伸ばしたまま固り、ときおり何かを喋りたそうにしては、

また下を向いてしまう。

一言も発せずにいたので、俺への疑惑はさらに深まるばかりだ。そんな感じで一限の授業開始まで過ごした。

かくして、俺の一年間のあだ名は決まった。

——「ロリコン」だ。

耳を澄ませば聞こえてくる事はあるかもしれないが、面と向かって言うやつは居ないだろう。

俺が居ない間に、「あのロリコンは、あのロリコンが」と、言われ続けるのだ。

ちよつと変なあだ名が付くだけならいいさ。

昨日まで親しく話し合っていた吉川君に前原君。クラスの中でも可愛い笹本さんとも仲良くなることが出来て、「よっしゃ！」って思ってたのに……、その誰も目線すら合わせてくれない。

去年同じクラスで一緒につるんでた恭介まで態度がよそよそしい。さすがの俺も、これには心の中で泣いてしまった。

クラスメイトの誤解は徐々に解いていくしかあるまい。

そしてもうひとつ気になる事が。咲耶の正体を知っていた彼女だ。だがその疑問は、さっそく一限目の授業で明らかとなった。

数学の教師が彼女を指名したのだ。

「じゃこの問題を……。秦宮、やってみろ」

「はい」

そう短く答えた彼女。

俺の周りの人垣を崩した時とは別に、すこし控え目な印象だった。長い髪をなびかせながら、黒板に出て問題を解いてゆく。

どうやら成績も優秀らしい。

先ほど例題をやっただけの応用問題を黒板で解いてしまった。

——秦宮詩織^{はたみやしおり}。それが彼女の名前だった。

魔王とは何なのかを教えてくれた、秦宮真理子先生と同じ苗字だ。

真理子先生は学年副主任で担任は持つておらず、俺のクラスの英語の授業も受け持っている。しかも、学園で最も人気のある（男子限定）、大人の魅力あふれるセクシーな先生だ。

先生と同じ苗字ならば姉妹か、あるいはお子さんか。

あんな若さと美貌で俺と同じ年齢のお子さんが居るとは信じられない。

だが俺の隣には、先ほどのHR後の尋問からずっと固まっている魔王さくやがいる。ありえないことなど、何ひとつとしてない。

もしかしたら秦宮先生自身が魔物まぶつって可能性も……。

美しいという点においてなら、ありえなくも無い話だ。でもさすがにそれは考えすぎたろう。仮にそうだとしたならば、秦宮詩織も魔物ということになるではないか。昨日の口ぶりからするに、先生は人間であると思う。

その推測は後に正しいと知ることになるのだが、それは別の話だ。

昼休みに携帯で呼び出されていた俺は、桜の大樹のさらに奥、普段は人が来ないところで美弥と落ち合った。

四限が終わると同時に、放心する咲耶の腕をここまで引っ張ってきた。途中からは半分抱きかかえるような形になっていたと思う。

「兄さんが『二股している』とか、『幼女を家で飼ってる』とか、

『美女をはべらせてる』とか。すごい尾ひれがついている噂が、一年生の教室まで来ていましたよ。おそらくこの分だと学校中に……」
ある程度は仕方ないと思っていたが、あまりにもひどい。

「美弥はお兄ちゃんのこと、信じてるよな？」

「はい、もちろんです」

いつもの笑顔で答えてくれた。

昨日の夜のことは、美弥の中では無かったことにしてもらえたらいい。

「ちゃんと説明してくれた？」

「それは……、わたしも新しい学校で大事な時期ですので、それで、

あの、その……」

「……………」

良く出来た妹は肩に下げていた鞆より、袋を3つ取り出した。

「さあ咲耶さん、お腹がすいているでしょう？ お弁当を作ってきましたので、みんなでいただきますでしょうか」

勇者として！（前書き）

妹の事となると人が変わるらしい

勇者として！

美弥が作ってくれたお弁当はおいしい。

でも咲耶は今はそれどころではないらしい。俺たちと三人きりでも、あの弾けるような元気な姿を見せてはくれなかった。

美弥は「あーくん」して咲耶に食べさせてはいたが、昨晚のように嬉々として飛びついては来なかった。

口に運ばれてきた物を機械的に喉の奥へ。

もぐもぐ……。もぐもぐ……。

「も、もう。帰り、たいのじゃ……。学園とは、かくも恐ろしい所なのじゃ……」

「転校初日ですからね。仕方ないのかもしれませんが」

「そうだなあ。今日、明日の辛抱さ。そのうち落ち着いてくるから」
「……………」

そんな俺の意見にしゅんとしてしまう。

可愛い転校生を見て興奮するのは判るが、元気の無い咲耶の気持ちにも気づいてあげてほしかった。後、よかったら俺の性癖とかもついでに……。

「咲耶さん、もうお弁当はよいのですか？」

「今は食事が喉を通らぬのじゃ。こんなに旨い弁当を……。すまんの美弥」

手で硬く握り締められていたスカートの裾すそ。その場所には下ろしたての制服であるにも関わらず、くっきりとした皺が作られていた。なんだか少しかわいそうになってきた。

「兄さん。ここは兄さんの出番じゃないでしょうか。期待していますよ」

そう妹に言われるまでも無く、どうにかしなくてはいけないか……。。

人が少なくなるように時間ぎりぎりまで桜の広場の奥にいた。
咲耶の手を手を引いて教室へと帰る。終始黙り込んで俯いたままだ。

幼女を拉致して時間一杯連れまわしてから教室へ戻った俺を、クラスメイトは怪訝な表情でもって出迎える。

——うっ……。

一瞬だがたじろいでしまう。

右手の中の小さな手が、強く握られたのを感じられた。

俺は先ほどの決意を新たにする。

俺は教室に凄みを利かせてから切り出した。

「みんな、聞いてくれ！」

教室中の関心がこちらに集まっていた。

「転校生である咲耶と仲良くしてくれることは、素直に嬉しいと思う。だけど咲耶は人付き合いがあまり得意ではないんだ。だから、咲耶がこの学園に慣れるまでそっとしておいてもらえないだろうか。たのむっ！」

俺は気づいたら頭を下げていた。右手から伝わってくる熱い感触。不器用だったかもしれないが、今の気持ちを正直にぶつけたつもりだった。

突然の事態に静まり返る教室。

そんな困惑気味の教室において、一人が生徒の群れ中から俺たちの前に出てきた。

委員長である秦宮詩織がまたもや助けになってくれたのだ。

「確かに私達も玖珂さんのことを考えずに詰め寄ったりして困らせてしまっていたわ。その点においては悪かったかもしれない。」

クラスメイトを説き伏せるように話しを続ける。

「そこで、こういうのはどうでしょう。玖珂さん、実はまだ自己紹介を済ませてはいないの。下の名前を知らない子も多いわ。幸い授業前で全員居るみたいだし……、この場で自己紹介をしていただい

て、私達からの質問はいったんお終い。ということはどうでしょうか」

重い空気の中、この提案に異を唱える者は居なかった。

咲耶は俺の手から離れて、自ら一步、前に進み出た。

「天のしら……。……。く、くが。くがさくや。く、玖珂咲耶、で、です……」

下を向きながらだったが、教室全体に十分聞こえる声で咲耶が自己紹介した。

「咲耶、もうひとつ言うことがあるだろ」

そんな俺の言葉に振り返りはせず、やけくそ気味に言った。というか怒鳴った。

「よ、よろしくおねがいします！」

元から下げていた頭をさらに下げて声を張り上げたのだった。

突然の大声に度肝を抜かれるクラスメイト達。

——パチパチパチ。

秦宮詩織が咲耶の不恰好な自己紹介に対して拍手を送った。それに続くようにして教室中からも盛大な拍手が沸き起こった。

自己紹介を終えた咲耶は俺の背中に隠れてしまう。その刹那に見えた彼女の顔は、決して悲しい表情ではなかった。

こうして咲耶は正式にこのクラスの一員として認められたのだった。

つかの間の平和が訪れた。

彼女には後でお礼を言わなくてはいけないだろう。正直いって頭を下げた時の、あの微妙な空気は、俺一人ではどうすることも出来なかっただろう。

極一部では、事実が露呈しないように牽制^{けんせい}してきたとか 転校生を独り占めだとか、そういう意見もあるようだ。

だが全体的にみれば俺の評価もわずかながらよい方向に傾いた……、気もする。

放課後。誰も居なくなった俺の教室に美弥がやって来ていた。

「みーやーっ！」

ちよっただけ明るさを取り戻した咲耶が美弥に飛びついて出迎えた。

「よい子にしていましたか？ 咲耶さん」

「うむ、わらわはいつでもよい子なのじゃ」

抱きかかえたままその場でくるくると回転している。やはり咲耶には笑顔が似合っていた。

「それにしても兄さん、あの後に何を言ったのですか？ あれだけ

あった噂が、どうやら――」

「――やめてくれよ。怖くて聞きたくない……」

「うふふ。恥ずかしがっちゃって……。やっぱり、兄さんは私の兄さんですね」

「うむ。あのときの信弥はかつこよかったのだ。わらわのために――」

「あーあーあーあー！」

そういうのは柄じゃないのであまり持てはやさないでほしい。

逃げるようにして窓の外に目をやった。

最後の授業がおわってから結構な時間が経ったが、いまだ下校する生徒達がちらほら見受けられる。

「まだ下校する方がいらっしやいますね」

「咲耶が慣れるまでは人が少なくなってから帰った方がいいからな。けど今は部活の部員獲得競争が激化してるから、しばらくはこんな感じなんじゃないかな」

「そうですね。ここへ来る際に私もたくさんの部活から勧誘されて

しまい大変でした」

「どんなところから勧誘されたんだ？」

「メジャーな部活はだいたい。どうやらどの運動部もマネージャーさんが足りないみたいでした。頭まで下げられてお願いされたときはどうしようかと困ってしまいました」

「『まねーじゃー』とはどういうものなのだ？」

それは妹がそんじょそらの娘子とは一線を画す存在だからですよ。マネージャーが足りないなど見え透いた嘘で妹とお近づきになりたいのだ。

よく出来た妹をどこの馬の骨ともわからない奴になど渡せるか！

これからは兄として、しっかりと注意して妹の事を見ておかねば。

「部活といえば、兄さん」

「なんだい妹よ。お兄ちゃんに何か用かな？」

どこぞのミュージカルばりに訴えかけるように腕を前へと広げ、まゆ毛をキリツとさせて我が妹に問いかけた。

急に変な態度になった兄を苦笑いでごまかす美弥。

そんな彼女はここに、世界征服の狼煙^{のろし}を上げた。

「ボランティア部、行ってみませんか？」

ボランティア部（前書き）

体と心には、傷が残らないようにしたから

ボランティア部

うちの魔王は妹によるトラウマもあってか、ボランティアに何か変な幻想を抱かされていたらしく、どうあっても行きたいらしい。

「わらわはぼらんていあしたいのだ！ 世界をせーふくするのだ！」
そう言ってきかない。

帰宅部だった俺が急に部活か。

でも美弥が咲耶に付いていくというならば、俺も付いていかねばなるまいな。

兄として。いや、勇者として！

咲耶の手を引いて、美弥の先導でボランティア部を目指す。さすが出来のいい妹は準備も万全だ。

昇降口で靴を履きかえ、上履きを抱えて外に出る。正面玄関よりグラウンドに沿って桜の広場と逆の方向へと進み、校舎の陰に隠れるようにして建っている我が学園の特色のひとつでもある部室棟を見つけた。

主に文科系の部室が入っているこの建物は何年か前に新しくなったらしい。広くゆったりとした部屋には教室にも付けられてないエアコンまで完備してある。

部活をやっている者にとっては、狭い教室というコロシウムに押し込められて睡魔や抜き打ちテストで攻撃してくるクリーチャーならぬティーチャーとの戦いに勝ち続け、死の間際に放つ期末テストという名のメガ〇テに生き残った勇者だけがたどり着ける楽園なのである。

当然HPが赤くなってしまった勇者は部活なんてやらせてもらえないわけが無く、放課後にティーチャーの攻撃に耐え続ける日々が待っているのだった。

下駄箱がたくさん並んでいる正面玄関から入った。

靴を変えてから、こぎれいな廊下を進む。

立派なプレートが吊り下げられている部室を次々と横切り、蛇口が五つ並んでいるピカピカな水のみ場を過ぎて、明るく清潔感あふれるトイレを越えて。

どんどん進んで、建物の一番奥にある非常口へとやってきた。

へっギュッ！

金属がこすれる嫌な音を響かせた錆びたステンレス製の扉をこじ開ける。

出た先には、赤や緑や黒の、色の分だけ年代を重ねたトタン屋根がある渡り廊下があった。

だんだんと雲行きが怪しくなって来たな。

「まさか……、この半分朽ちたようなスノコの先に続いているプレハブ小屋が目的地なのか？」

「はい。今日行われた部活のオリエンテーションの資料にはそうあります」

「秘境の湧き湯へ行く時の感じに似ておるのお」
ちよつとだけ咲耶が怖がってる気がする。

黒ずんだ鉄骨と痛んだクリーム色の壁をしたプレハブ小屋が並ぶ深部。あんまり日のあたりがいいとはいえないその一角。電気はかろうじて通っているらしい。

「どうやらここみたいです」

手書きで「ぼらんていあぶ」と書かれたプラスチックの白いプレートがぶら下げたある。強い風が吹いたら飛ばされそうな感じだ。世の為人の為になることをする前に、まず先にこの部室をどうにかしたほうがいいと思うぞ。

意を決して、この秘境の隠れ家の戸口を叩く。

ノックをこんこん。

すると、中から「どうぞ」と一声。

へっギュッ！

これまた嫌な音を出すドアを開けて中へとお邪魔する。

鬼が出るか蛇が出るか……。

——どうやら、そのどちらも間違っていたらしい。

ボランティア部の部室には……、牛さんがいた。

白く清純なブラウスに秘められた柔らかな巨峰。纏うブレザーの胸元の逆三角形から圧倒的な自己主張を行っている。

ワガママなボディーとは対照的に、知的なお姉さんといった印象。肩まである髪を簡単にまとめたポニーテール。後ろに持っていないかった髪を顔の横からそのまま下へ垂らしている。

凛々しい顔にはフチ無しのお洒落なメガネ。

左手には読みかけの本を掲げている。

「ようこそ」

無表情で迎えられてしまった。

「私は二年二組、橘遥香。たしばなはるかよろしく。……入部希望？」

「ああ。俺は同じ二年の東條信弥。こっちは妹で一年の美弥。そしてこの後ろに隠れてるのが、今日転校してきた玖珂咲耶。くがさくやよろしくたのむ、橘さん」

「お久しぶりです橘先輩」

「二人とも、遥香と呼んでくれてかまわない」

なぜだか知り合いの二人。よく出来た妹は交友関係のも広いのかもしれない。

冷やかしではないと知ると、手に持った本を置いて話を続ける。

「じゃ遥香。君がこの部の部長なのか？」

「うん、私がボランティア部の部長。君が今学校で噂のロリ——。

……いえ、なんでもない」

何て言われようとしたのか凄く気になる。

「わざわざこんなメンドクサイ部活に入るなんて、Mなの？」

「エッ？」

「……冗談。歓迎するヨ。まさか本当に希望者が来るなんて。捨てないでおいて正解だった」

包み隠さずストレートな意見をおっしゃる方なのかもしれない。

教室にあるものと同じタイプではあるが、多少歪んでいる机に身を屈めてごそごそと中を漁り出した。

目的の物を見つけ、やっとといった感じで体を起こした彼女。その躍動感溢れる胸部からは女体の神秘を感じ取った。

「これ、入部希望書」

ずいぶんと黄ばんだ紙を三枚差し出される。

「ここは去年までは部だったの。といっても、卒業した先輩方が横にある部室棟の部屋を使いたいがために作ったような部活らしかったけど」

それであのプレートか……。

「その部活を私がもらったまではよかったのだけど、部屋が足りたという理由であっちを追い出されてしまった」

「そうだったのか。ちなみに顧問の先生とかは居るのか？」

「秦宮真理子先生。二年の英語は全クラス担当してると思う」

今まで黙っていた咲耶が突然割って入って遥香に声を掛けた。

「おぬしも勇者なのか？」

「そういうあなたは魔王」

一瞬、鋭い視線が交錯する。

咲耶は言うだけ言って、いつもの調子で俺の制服をぐいぐいやり始めた。

秦宮詩織といい橘遥香といい、情報化社会の現代において魔物は結構ポピュラーな存在だったりするのか。

「なぜ咲耶の正体を知ってるんだ？　そもそもこの部活は何をするところなんだ」

「あなた達になら、言ってもいいかな」
相も変わらず抑揚の無い声で続けた。

「学園内外のゴミ拾いや行事に駆り出されたり。地域のお祭りのお手伝いとかの奉仕活動。いわゆるタダ働き。魔物退治なんかもたまに」

「へえー。結構まともな活動をやってるんだな。……ん？　最後に

妙な言葉を聞いたような」

「ただ働き？ やっぱり労働の対価って必要だと私も思っ——」

「いや、そっちじゃなくて」

「奉仕活動なんてものは自己満足型の方々にやらせておけばいいと思う。新しい部活発足の審査は結構厳しいらしくて、この部を乗っ取ったんだけど。もう少し考えればよかった」

「いや、ちがくて。てかさラリと怖いこと言わないで……」

「確かにちよつと強引だったかもしれないけど、実際の活動が伴わないような部をおとし陥れるのに、何のためらいも無かったわ」

「も、もうそれ以上聞きたくない……」

「じゃあ、魔物退治？」

首をこくこく上下に動かす。

「知性も持たないようなのが常世とこよから迷い込んでくることがある。それを退治する、というかそれが主な仕事、……になってほしい。意志がある魔物のほとんどは友好的だし、話したらちゃんと判ってくれる」

非常に衝撃的なことを聞いてしまった。退治と聞いて思わず尻込みしてしまう。

「どうする？ やっぱり入部、やめる？」

なんとなく危険な香りが漂い始めた空気の中、恐れを知らぬ我が魔王は、

「もちろん、ぼらんていあするのじゃ」

そう声高らかに宣言するのであった。

「私はこれ、秦宮先生に出していくから今日は帰ってもいいよ」
上手く書こうとして逆に不揃いになってしまったものと、丸みを帯びながらもバランスよく丁寧に書かれているものと、ミミズがのた打ち回ったようなもの、三枚の入部希望書をひらひらさせて言った。

「これ、私の連絡先。夜にでも連絡を頂戴」

そういい残して校舎へと消えていった。
それを見届けた俺達も家路へと向かう。

「咲耶さん、学園は楽しかったですか？」

「うむ、たまにならこういうのも悪くないの」

「何言ってるんだ。明日から毎日行くんだぞ？」

「な、なぬ……？」

目が点になってしまった咲耶だが、

「し、信弥と美弥が一緒ならば、考えてやらんこともない、かのお
？」

秦宮姉妹の姉（前書き）

先生が優しく教えて、あ・げ・る♪

秦宮姉妹の姉

昨日に引き続き今日も、いやがる魔王を連れて学園へと向かう。

巫女服の時よりは目立ってはいないが相変わらずの有名人っぷりで、カチコチな咲耶の手を引いている俺への注目もひとしおだった。朝の教室においては質問攻めにされることは無かった。

昨日の一件でみんな理解してくれたらしい。

たまに女子が隣に居る俺をガン無視して咲耶に一言挨拶をしてくれる。

テレながら上目使いで小さく「……おはよう」と言う咲耶に彼女達はメロメロだ。

しかしながら、廊下からこちらを覗く顔が多いこと多いこと。

咲耶目当てなのだろうが、人が集まって異様な雰囲気だ。

そんな彼らもチャイムがなると同時に自分達の教室へ帰っていく。「今朝は先生がいらっしゃいません。なので、出席だけ私が取りま

す。連絡事項は昨日言われた通りで変更はありません。忘れないでください」

クラス委員長である秦宮詩織^{はたみやしおり}が先生の変わりに出席を取っていく。早速『委員長』という呪い^{カース}が彼女を縛り付けている。

だが秦宮詩織の人望もたいしたもので、一日ですっかりクラスの中心人物となっていた彼女によってスムーズに出席が取られていく。根は真面目であるようで、与えられた仕事をしっかりとこなしている。また、楽しんで仕事してるようなので仕切り屋タイプなのかもしれない。

そして四限の英語の時間がやってきた。

へーコツツ、コツツ、コツツー

誰も居ない廊下からヒールが響く音が近づき、この教室の前で止まった。

開け放ったドアを後ろ手で閉めて、堂々とした面持ちで前へ。
純白のYシャツに漆黒のベスト、真紅のタイトミニから生足を晒さらして、その淫魔はやってきた。

持っていた教材を教卓の上にバサリと放り投げる。

背を向けて、チヨークを拾い上げ、黒板に押し当てた。

「カッ!」

筆記体で滑らかな文字を綴り終わると、持ったチヨークを打ち捨てて。
こちらに向きなおり、空いた手をわざわざ胸の下で組んで絶景の

双丘を見せ付けてくる。

教壇の一段高い所から品定めするかのように鋭い視線で全体を見渡してから、

「知っている生徒も多いと思うが……。二年学年副主任で、この学年の英語を担当している秦宮真理子だ。お前達、あんまり面倒事は起こすんじゃないよ。ちなみに、質問は受け付けない。じゃ授業を始めるからね」

横暴な自己紹介だった。

男子生徒は肉体も精神も唯我独尊な彼女に惚けたように一挙手一投足を観察している。女子生徒はデキる大人の女性に憧れの眼差しを向けている。

教科書を読みながら、今夜の獲物を物色するかのように教室を徘徊する淫魔。

いや、違った。

教科書を読みながら、次に指名する生徒を選ぶように教室を歩き回る先生。

スラリと引き締まった生足を見せ付けながら机の間を行ったり来たり。

近寄ってきた先生に思わず目が行ってしまう。

服の上からでもハッキリと想像できる括れた腰と天に向かって突き出された胸のラインは、オトコならば誰でも誘惑されてしまい、

否が応でもその存在を強く意識してしまう。

俺達を魅了してやまない彼女の通り過ぎた道には、本能を惑わせるエレガントなオトナの香りに誘われた男子の視線がその後を追うかのように泳いでいる。

フェロモンを撒き散らしてリビドーあふれる年頃の男子生徒を誘惑しているようだ。

こ、この先生は学園に男でも漁りに来ているのだろうか……。

こうまでされたら秦宮真理子先生が実は魔物だという可能性も再検討しなくていけないだろう。

秦宮詩織は何か我慢できない感じで頭を抱えている。

やはり二人は何かしら関係があるようだ。

「All right. Ms Kuga. Repeat after me.」

なんてことだ。俺が誘惑されていた間に咲耶が指名されてしまった。

そんな俺の不安をよそに、おどおどした様子で立ち上がった彼女は教科書を掲げて読み始めた。

「……い、It is normal to make errors in speaking a foreign language, one learns to speak better by having one's mistakes pointed out and corrected.」

淀みなく読まれた完璧な発音に教室中の視線が咲耶に集中する。

さすがの事態にこの俺も、通り過ぎた生足ではなく隣の魔王さくやを見失ってしまった。

そんな視線を受けてか、咲耶は椅子の上で小さく縮こまり、立てた教科書を盾にしながら机に伏せて顔を隠している。

「That's Excellent!! あんた達も私の足ばかり見てないで、Ms Kugaを見習って教科書をしっかり見てなさい」

先生の言葉はごもつともな意見ではあるが、これみよがしに生足を目の前で動かす先生も悪い。というより、咲耶が英語がぺらぺらだとは思わなかった。

誘蛾灯のような先生は、再度教室を練り歩き英文を流暢りゅうちように読み始める。

当てられた生徒はなぜだか話を聞いていない者が多く、そのたびに同じ質問を先生にさせていた。

呆れたように髪をかきあげる先生。

強調されるムネとワキの造形美。

高く掲げられた細い腕から流れる形が重力と理性に反逆する胸部を際立たせる。

振り下ろされた腕から伝わる振動に震える母性と劣情。

……これ以上ガン見するとあらぬ誤解を受けそうなのでこの辺にしておこう。

とまあ、こんな感じで授業は進んでいった。

〈キーン、コーン、カーン、コーン！〉

「おっと、今日の授業はこれで終わりだね。昼休みになるけど、次の時間のことも考えてあまりハメを外しすぎるんじゃないよ」

そう釘を刺して、淫魔は自らの巣に帰っていった。

英語が毎回こんな調子だといろいろと我慢出来なくなってしまっているんじゃないだろうか。

もんもんとした気持ちを抱えたまま昼食の時間になる。

美弥が昨日と同じ場所で待ってくれているはずだ。昨日連絡した橘遥香も来るらしい。たちはなほるか

「ねえロリコン。話があるから、ちょっと来なさいよ」

さっきまで居心地悪そうにしていた秦宮詩織がいつのまにか目の前まで来ていて、座っている俺を見下ろしながら言った。

まさかこんなに早く面と向かって言われることになるなんて……。教室はその「ロリコン」という言葉に静まり返り、俺達の行く末

を見守っている。

彼女にはお礼を言わないといけないと思っていたが、やっぱり止めとこ……。

秦宮姉妹の妹（前書き）

もおく、恥ずかしいからヤメテよ。お姉ちゃん！

秦宮姉妹の妹

「ねえロリコン。話があるから、ちょっと来なさいよ」

そう上から物申すのは、委員長である秦宮詩織だ。はたみやしおり

クラスメイト達はまさかの凸撃に対して遠巻きにこちらを伺っている。

「まさかとは思うが、ロリコンとは俺のことかな？」

「そうよ。いま学園で一番有名なロリコンといえば、アナタのことよ」

これ以上は傷口に塩を塗るだけなので大人しく従おう。

それに彼女とは、昨日の魔王発言からまだ話せずにいたのでいい機会だと思う。

だがこれから美弥たちとの昼食の約束もある。

「昼休みは咲耶と一緒に先約が入ってるんだ。先に咲耶だけでも送ってもいいかな」

「かまわないわ。私も東條君と二人だけでお話しがしたいの」

ということ、美弥に短く用件だけ入れたメールを送り、迎えに来てもらうことに。

不安がる咲耶の手を引いて昇降口まで連れて行く。その後ろからは詩織がびったりと付いてきている。

これから島流しにされるかのような咲耶は、俺の顔を見たり下を向いたりもじもじとした様子で不安がっている。ずいぶん可愛い仕草だが、ここは心を鬼にしなければいけない。

「ここに居れば美弥がすぐに来てくれるから」

「信弥が、我を置いて、どこかへ行ってしまうのだ……。こ、これからは、もっとよい子にしておるから、わ、わらわを捨てないで、ほしいのじゃ……」

「そんなに大袈裟なことじゃないから……。だれも取って食いはしないよ」

頭を撫でてやってから、咲耶を残しその場を後にする。

隅っこで丸くなり、こちらが見えなくなるまでちらちらと見ている魔王まおうをあのままにしておくのは忍びなかったが、よく出来た妹がすぐに見つけてくれるはずだ。

黙って詩織の後ろを付いていく。

二年生エリアである三階のさらに上。普段使われない屋上へと続く薄暗い階段へやってきた。咲耶は無事に保護されたらしい。

この学園にも一応屋上がある。

ちゃんとフェンスで囲まれてはいるが、当然一般生徒は立ち入り禁止である。

そんな屋上の鍵をどこからともなく取り出した秦宮詩織。

「ちよっと、何でこんな物持ってるのか気にならないの？」

「え？ それはまあ気になるけど……」

「そうでしょう？ 人に吹聴してまわるような話でもないから念のためね。こういう機会でもないとなかなか来れないのよね」

どこか得意げな感じなのはいいが、鍵を差し込もうと暗がりの中で悪戦苦闘している。

〈カチャリ〉

鍵が開く音が鳴った。ドアノブを握ったまま俺の顔を見て言う。

「屋上から見る桜もいいものよ」

そう言って開け放たれたドア。

暗い廊下を春のうららかな日差しが照らし、誇りっぽい空気を吹き飛ばすように涼しい春の匂いが吹き抜けていった。

四階の高さから見る桜は新鮮で、その大きさを改めて実感した。

パノラマに広がる木の枝から咲く花びらがカーテンのように樹木を覆い隠しており、屋上の床には花びらが舞い散っている。

「じゃ改めまして、秦宮詩織はたみやしおりよ。よろしくね、信弥君しんや。お姉ちゃんのこともあるし『詩織』、なんなら『委員長』って呼んでくれてかまわないわよ？」

「東條信弥だ。詩織さんって呼ばせてもらうよ。こちらこそよろし

く、詩織さん。やっぱり秦宮先生とは姉妹だったのか」

「こんな引く張るつもりはなかったんだけど、あなたがたが面白くって、ついね」

そう言ってウインクしながら舌を出しておどけてみせる彼女。絵になる光景だった。

「だから魔物のことについては一通りは理解してるわ。あの魔王さくやちゃんのことで困ったことがあったら私に相談してちょうだい。女同士だし力になれることもあると思うわ」

「ありがとう。そのときは相談させてもらおうよ」

咲耶の味方が増えるたのは心強かった。

「それにしてもさっきのロリコンは言いすぎじゃないか？ 俺のガラスのハートが音を立てて砕け散ったぞ」

「あんた、お姉ちゃんをいやらしいし目で見てたでしょ。そのお返しよ」

ガン見してたのをしっかりと目撃されていたらしい。

「見たたのは俺だけじゃないだろ？」

「やっぱり見てたんじゃない……」

確かにあの光景は目に焼き付けたのでいつでも思い出せる。

そう、あの大きなムネとすべすべの足――。

〈ドカッ〉

スネに蹴りが飛んできた。

「な、なにすんだよ。いきなり」

「あんた、今いやらしいこと考えてたでしょ」

「……………」

手ごわい相手のようだ。

仕切りなおすように咳払いを一つして、

「それにしても秦宮先生は魔物の類か何かなのか？ 俺の予想ではサキュバスだと」

「はあ？ あんた、その台詞お姉ちゃんが聞いたらマジどうなるかわからないわよ」

青い顔をして引いたように言う。立場的にも姉がかなり強いらしい。

もしかすると俺は大変なことを言ってしまったているのかもしれないな。

「ん？　ちょ、あんた、その理屈から言うと、妹の私も魔物だと思っ
っているの？」

「そこまでは言っていないよ」

「あんたが思わなくても、そう言われているのと同じなのよ。いい？　私達はれっきとした人間よ。私はあなたと同じ年で、お姉ちゃんとは少し年が離れてるだけ」

「それにしても今日の秦宮先生は刺激的だったな。普段からあんな感じなのか？」

「私って今日初めてお姉ちゃんの授業受けたのね。それでお姉ちゃんが私のことをからかうためにあんな派手な格好してたんだと思う。いつもはもう少しだけ大人しい服装なんだけど……、私服はあんな感じね。今朝やけにニヤニヤしてると思ってたらああいうことだったみたい。恥ずかしいってらないわ」

　　楽しそうな姉妹の仲らしい。

「内緒だけどね、お姉ちゃん彼氏が出来ないの気にしてるみたい。

『私には仕事があるんだー』とか酔った勢いで叫んだりとかしちゃって。妹の鼻眉目無しに見ても、お姉ちゃんって若くて、スタイルもよくって、顔だっていいじゃない？　信弥君はどうしてだと思っ
る？」

「んー……。やっぱり高嶺の花って感じがするな。完璧すぎておい
それと手が出せないというか」

　　素直にそう思う。あの先生に手を出せる自信のある男はそうはお
るまい。

「やっぱり男の人ってそう思っちゃうのかしら。教師って忙しいみたいだし、神社のお仕事もあるから出会いも全然ないってばやいたわ」

「詩織さんは先生と仲がいいんだな」

「な、なんでそうなるわけ。わ、私も将来はお姉ちゃんみたいになりたいから、失敗しないように参考にと思って……。って何言わせてるのよ！」

自爆気味の詩織は怒ったからなのか恥ずかしかったからなのか、赤くなった顔を逸らした。

「そうそう、昨日お姉ちゃんから聞いた。魔王と一緒にボランティア部に入部したそうじゃない」

「咲耶がどうしてもって聞かなくてな」

「私も紹介してよ。ボランティア部に入ってあげるわ」

「どうしてそうなるんだ？」

「私が入ると五人になるじゃない？」

「橘遥香と、俺と美弥と咲耶と、詩織さんで、5人になるな」

「そうしたら、部として認められて部室棟に移れるかもしれないわよ？」

「そ、それは魅力的だな」

思わず飛びついてしまった。毎日あの嫌な金属音を聞かされると頭がおかしくなりそうだ。

「それに魔王はちゃんと監視しておかないとね」

「咲耶はそんなに危険だとは思えないが」

「そうかしら。心あたりとかは無いの？」

そう言われてしまうと、あの一件を思い出してしまう。言葉を詰まらせた俺に詩織が見透かしたように言う。

「そういうわけで、今日の放課後にでもよろしくおねがいね」

「しょうがないなあ」

その答えに満足そうに頷いた詩織。

そう約束して俺達は屋上を後にした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1697y/>

どうやら、いじめられっ子の魔王が俺と世界征服したいそうです。

2011年11月18日03時51分発行